

第7章 特別支援学校（聴覚障害）の総括

本章では、前述の幼稚部（第2章）、小学部（第3章）、中学部（第4章）、高等部本科（第5章）、高等部専攻科（第6章）における調査結果の総括として、特別支援学校（聴覚障害）全体のデータに基づく実態調査の結果を述べる。

なお、実態調査は、全国の特別支援学校（聴覚障害）を対象とした全国実態調査（令和元年度実施）と、令和元年度の全国実態調査の内容に係わる追跡調査（令和2年度実施）の2つの内容で構成されている。令和2年度に実施された追跡調査の結果は第10章を参照されたい。

I 全国実態調査の結果

1. 全国の特別支援学校（聴覚障害）における回答状況

全国の特別支援学校（聴覚障害）107校（本校95校、分校・分教室12校）に対して、メールにより、各校の学校長に依頼文書と調査用紙（エクセルファイル）を配信し、調査依頼を行った。

その結果、107校全ての学校から、2019年5月1日現況として、在籍幼児児童生徒数5,706人、その内、人工内耳装用児数1,894名という回答を得た。このことから、全国の特別支援学校（聴覚障害）に在籍ないし所属する幼児児童生徒における人工内耳装用率は概ね33.2%であることが明らかになった。

特別支援学校（聴覚障害）における人工内耳装用幼児児童生徒の数は、表7-1の通り、全体で1,312名分の幼児児童生徒に関する回答が得られた。令和元年5月1日現在の学校からの報告による人工内耳装用幼児児童生徒総数は1,894名であり、約69.3%の回答率を示した。

表7-1 特別支援学校（聴覚障害）における対象幼児児童生徒数（人）

学部\重複障害の有無	重複なし	重複あり	計
幼稚部	264	46	310
小学部	334	115	449
中学部	177	65	242
高等部本科	196	53	249
高等部専攻科	37	5	42
計	1,008	284	1,292
その他（学部不明）	1	18	19
合計		1,311	

なお、分析の際には、欠損値1名分を除く、「重複なし」の幼児児童生徒1,008名、「重複あり」の幼児児童生徒284名、学部不明者19名の1,311名分を主な分析対象とした（分析内容によっては、1,350名全員を対象とした内容もある）。

2. 教員に関する集計結果

1) 集計結果

(1) 教員歴

幼児児童生徒1,311名に対して回答された教員の総数は、695名であった。695名の年齢構成は、表7-2の通りであった。年齢の幅は22歳から67歳まで、平均41.3歳であった。

表7-2 回答者（教員）の年齢構成（人）

年齢	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台	未記入	計
人数(人)	121	188	205	139	32	10	695
(%)	(17.4)	(27.1)	(29.5)	(20.7)	(4.6)	(1.4)	(100)

(2) 指導歴

教員歴および各種学校等における指導歴を表7-3に示した。

平均教員歴16年以上になっており、聴覚障害児に対する指導歴も、9.2年、特別支援学校（聴覚障害）の指導歴も8.7年となっており、平均的に指導経験の豊富な教員による回答と思われる。

一方、これらの教員の特別支援学級（難聴）や通級指導教室（難聴）、通常学校における指導歴は0.2年と1.6となっており、一般教育における指導歴は短期間であるものの、聴覚障害教育の中堅としての豊富な経験を有する教員による回答と見なされた。

表7-3 回答教員の教員歴と各種学校での指導歴

内 訳	対象教員 (人)	未回答 (人)	平均指導歴 (年)	指導期間 (年)
教員歴		10	16.4	0～44
聴覚障害児指導歴		12	9.2	0～39
特別支援学校（聴覚障害）の指導歴	695	8	8.7	0～39
特別支援学校（聴覚障害以外）の指導歴		20	4.7	0～38
特別支援学級（難聴）・通級指導教室（難聴）の指導歴		31	0.2	0～16
通常学校指導歴		29	1.6	0～34

(3) 学習を希望する研修内容

人工内耳に関連し、特別支援学校（聴覚障害）の教員が学習を希望する研修内容に対する回答は、合計1,022件の、回答があった。1,022件の回答文について、テキストマイニングによるクラスタ分析を行った結果、図7-1のようなクラスタマップが示された。

1,022件の内容を分析した結果、1,157の内容語が抽出され、概ね38個のクラスタが作成された。内容語の頻度に基づく主なクラスタを表7-4に示す。

その内容は、人工内耳の基礎的研修に関する希望から、人工内耳関連機関の説明、人工内耳装用児の聴覚、人工内耳装用児の聞こえ、人工内耳装用児に関する留意事項、人工内耳の最新

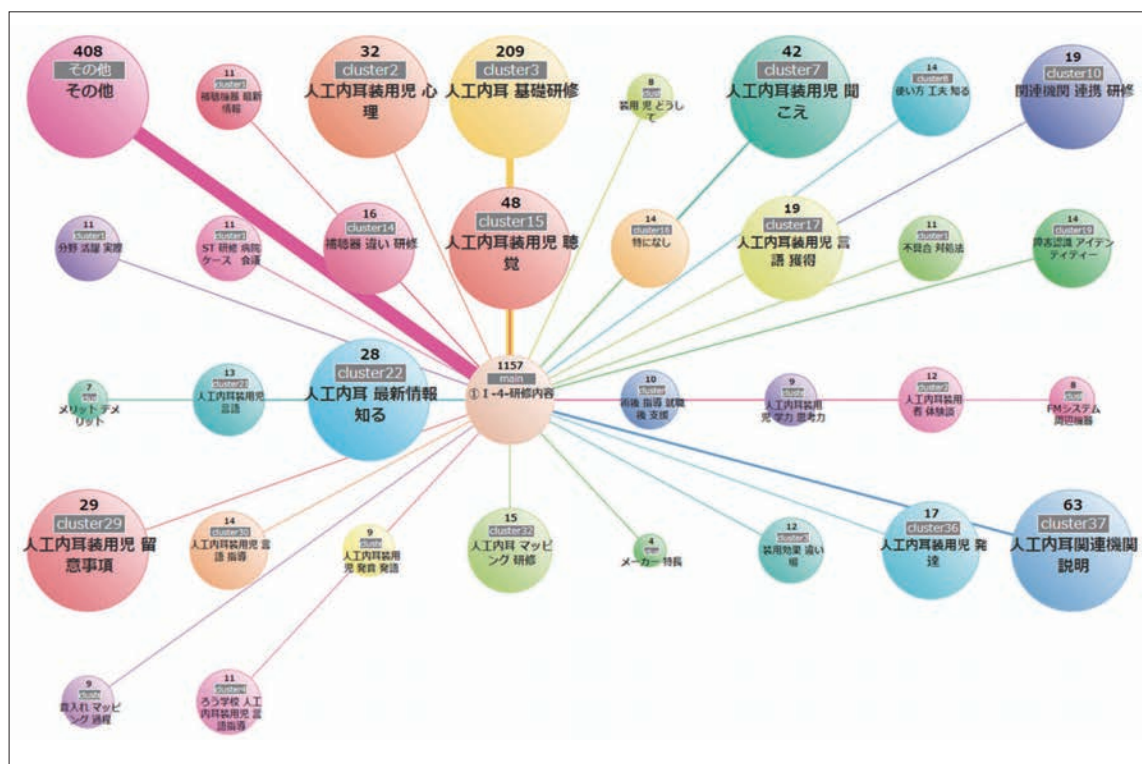


図7-1 学習したい研修内容に関するクラスタマップ

表7-4 教員研修の希望内容（内容語数）

1. その他（408）
2. 人工内耳の基礎的研修（209）
3. 人工内耳関連機関の説明（63）
4. 人工内耳装用児の聴覚（48）
5. 人工内耳装用児の聞こえ（42）
6. 人工内耳装用児に関する留意事項（29）
7. 人工内耳の最新情報を知る（28）

※（ ）の数字は、全体内容語1,157語のうち、当該クラスタに出現した内容語の数

情報などが多く、その他の数の多さが示すように、多岐にわたっているといえる。

クラスタ別の希望する研修の内容に関する記述の一部を以下に示す。

①その他

- ・ 青年期人工内耳装用児（者）の心理（自己認識）
- ・ 人工内耳の最新機器やアクセサリなどの情報
- ・ 人工内耳関係機関による手入れ方法の研修
- ・ 体育的活動の可否（頭部にボールがぶつかる、衝撃が加わる可能性のある種目等）
- ・ 手術前後で必要なケア

②人工内耳の基礎的研修

- ・ 基礎的知識に関する研修
- ・ マッピング
- ・ 設定の仕方
- ・ 性能の違い

③人工内耳関連機関の説明

- ・ 人工内耳関連機関による説明会
- ・ 医師等による人工内耳に関する最新情報の紹介や報告

④人工内耳装用児の聴覚

- ・聴覚学習 ・発音指導 ・言語指導 ・発音指導の研修

⑤人工内耳装用児の聞こえ

- ・聞こえの特徴 ・指導に当たって配慮すること ・人工内耳と聞こえの指導方法
- ・家族の思い ・聞こえやコミュニケーション ・学習等の現状と課題 ・ことばの発達

⑥人工内耳装用児に関する留意事項

- ・人工内耳装用児に対する療育 ・教育のノウハウや留意事項 ・配慮事項
- ・人工内耳の機種や特徴 ・人工内耳と補聴器の違いによる指導上の配慮点など

⑦人工内耳の最新情報を知る

- ・人工内耳の最新情報 ・聴覚の解剖生理と人工内耳に関する基礎研修
- ・医療機関や製造機関等による最新の情報の提供 ・学校におけるトラブルシューティング
- ・最新の人工内耳システム情報や研究知見

3. 担当幼児児童生徒が在籍する学級について

1) 担当学級の規模と人工内耳装用幼児児童生徒の割合

対象幼児児童生徒1,311名について回答された特別支援学校（聴覚障害）教員696名の担当学級の幼児児童生徒数、および人工内耳装用幼児児童生徒数を表7-5に示す。

特別支援学校（聴覚障害）全体における担当幼児児童生徒数は、7.08名、うち人工内耳装用幼児児童生徒は全体の43.7%を占める3.09名であった。担当幼児児童生徒数が47人の回答も見られるが、通常の学級担任体制ではない、自立活動、聴能担当、音楽、美術などの専科担当教員による回答として考えられた。

表7-5 1学級あたり担当幼児児童生徒数と人工内耳装用人数

学部	対象幼児児童生徒数（人）	回答数（件）	担当幼児児童生徒数（人）	人工内耳装用幼児児童生徒数（人）	担当幼児児童生徒における人工内耳装用の割合（％）
幼稚部	310	304	5.97	3.20	53.6
小学部	449	443	6.21	3.08	49.6
中学部	242	237	8.28	3.11	37.6
高等部本科	249	255	8.59	2.98	34.7
高等部専攻科	42	36	4.31	2.21	51.3
全体	1,311*	1,275	6.67	2.97	45.4

合計の対象幼児児童生徒の数は、学部不明19名を含む

2) 医療機関との連携について

(1) 連携の有無について

連携の有無は、表7-6に示すとおりである。全体として、連携ありが連携なしより、幾分高い数字を示した。幼稚部は、連携ありが86.8%に上っている。幼稚部から小学部にかけては、連携ありが高い傾向が示されるが、中学部では連携ありとなしの割合がほとんど同程度になっ

ている。高等部本科と高等部専攻科においては、連携なしの割合が高い。医療機関との連携は、概ね半数以上の幼児児童生徒において連携が取られていること、その実態は、幼小中を中心に連携しながら、年齢の上昇に伴い、その割合が減っている様子がうかがえた。

表7-6 連携の有無別の頻度 件数 (%)

連携の有無/各部	幼稚部	小学部	中学部	高等部本科	高等部専攻科	計
連携なし	36(11.6)	150(32.8)	107(43.5)	166(65.6)	39(92.9)	498(38.0)
連携あり	270(86.8)	292(63.8)	132(53.7)	83(32.8)	3(7.1)	781(59.6)
無回答	5(1.6)	16(3.5)	7(2.8)	4(1.6)	0(0)	32(2.4)
計	311(100)	458(100)	246(100)	253(100)	42(100)	1,311(100)

(2) 医療機関との連携

人工内耳に関連し、特別支援学校（聴覚障害）の教員の医療機関との連携内容は、合計887件の回答があった。887件の回答文について、テキストマイニングによるクラスタを分析した結果、図7-2のようなクラスタマップが示された。

695件の文書を分析した結果、1,138の内容語が抽出され、概ね38個のクラスタが作成された。内容語の頻度に基づく、主なクラスタを表7-7に示す。

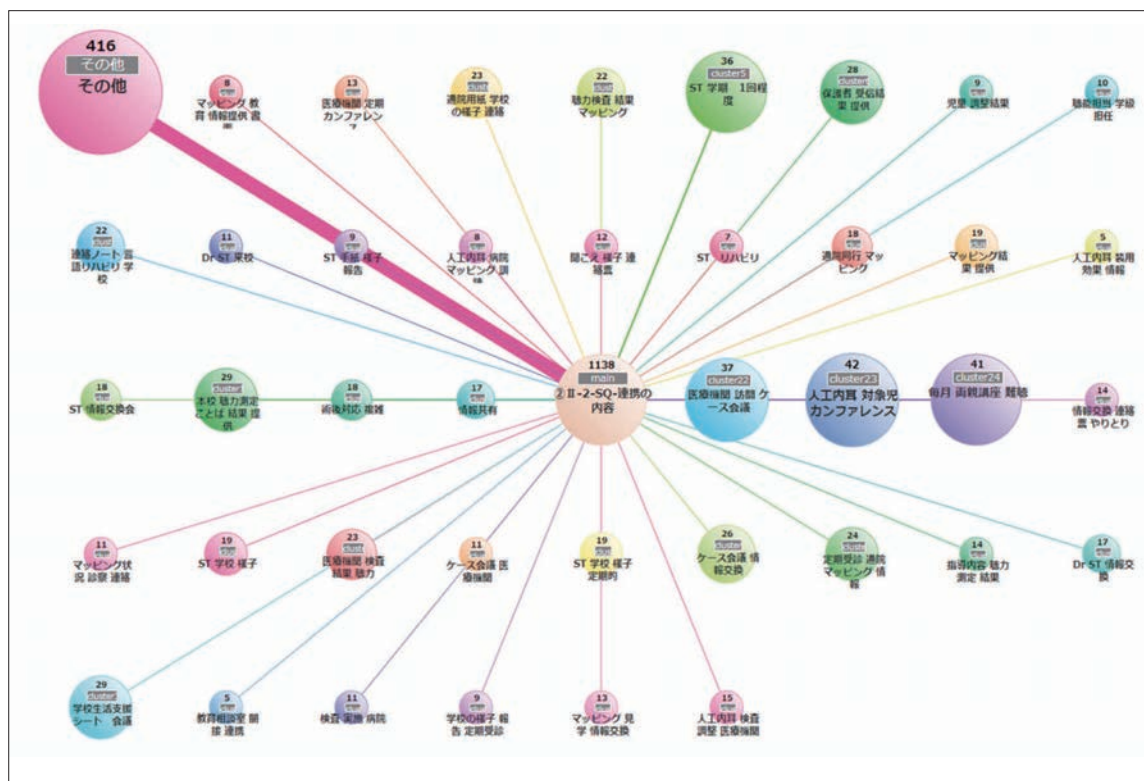


図7-2 連携の内容に関するクラスタマップ

表7-7 医療機関との連携の内容（内容語数）

1. その他（416）
2. 手術対象児のカンファレンス（42）
3. 毎月の両親講座（41）
4. 医療機関訪問ケース会議（37）
5. ST等による指導・研修会（36）
6. 学校との連携：聴力測定・ことば評価等に関する情報の提供（29）
7. 学校での生活支援や様子の記録を提供（29）
8. 保護者による定期的な受診記録の提供（28）
9. ケース会議による情報交換（26）
10. 定期受診やマッピングの情報の提供（24）
11. 医療機関からの受診結果や様子などの情報提供（23）

※（ ）の数字は、全体内容語1,138語のうち、当該クラスタに出現した内容語の数

医療機関との連携内容は、表7-7に示す通り、ほとんどが人工内耳装用児に関する学校と医療機関との情報共有の内容であった。定期診察やマッピングの際に教員が対象児の保護者と一緒に医療機関等を訪ね、必要な情報の提供ややりとりを行うケースも多く見られた。

4. 人工内耳幼児児童生徒の指導について

人工内耳幼児児童生徒の指導全般について、補聴器装用幼児児童生徒との指導上の違いに着目し、指導上の課題、指導上の工夫、指導しやすい点の3つの質問を設定し、調べた。

1) 指導上の課題

人工内耳装用幼児児童生徒の指導に際して、補聴器装用幼児児童生徒と比較して、異なる指

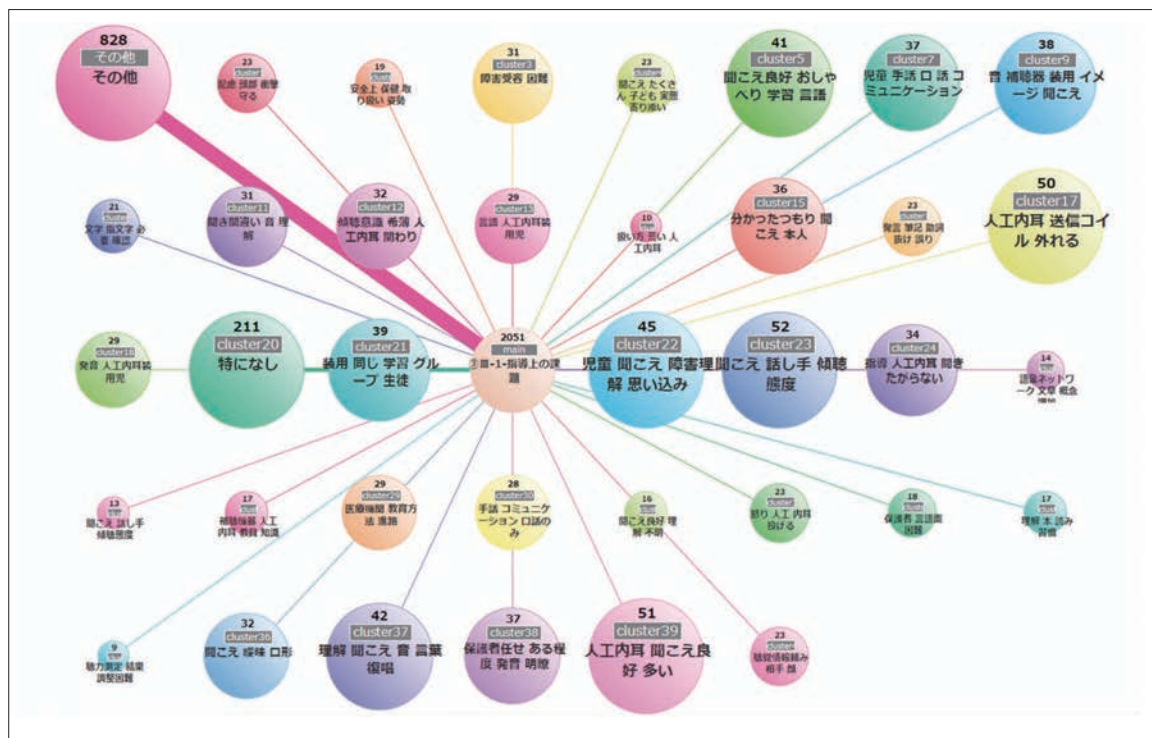


図7-3 指導上の課題に関するクラスタマップ

導上の課題について、記述を求めた。その結果、指導上の課題について、合計1,145件の回答があった。1,145件の回答文について、テキストマイニングによるクラスタ分析を行った結果、図7-3のようなクラスタマップが示された。

1,145件の回答文を分析した結果、2,051の内容語が抽出され、概ね39個のクラスタが作成された。内容語の頻度に基づく主なクラスタを表7-8に示す。

表7-8 指導上の課題（内容語数）

1. その他（828）
2. 特になし（211）
3. 傾聴態度・聞こえや話し手の認識（52）
4. 聞こえが良い（51）
5. 機器管理上の問題（送信コイルが外れても気にしない）（50）
6. 障害認識、思い込み（45）
7. 聞こえているが、理解できない（42）
8. 補聴器装用児と変わらない（39）
9. 音の受容はいいが、言葉のイメージが掴めない（38）
10. 視覚的コミュニケーションに頼る（37）
11. 保護者の認識や支援（37）

※（ ）の数字は、全体内容語2,051語のうち、当該クラスタに出現した内容語の数

特になしという答えの他に、聞き取りと言語力に関する課題が多く示されている。音としての知覚には優れているものの、言語力、認知力、経験の不足から来る言語理解力の不十分さが指摘されている。話はできても文字として表すことに困難、手話の必要性に気付いていないなどの、その他という指摘も比較的多く見られた。

指導上の課題に関する具体的な記述の一部を以下に示す。

①その他

- ・行動上の制約の存在 ・音過敏 ・人工内耳装用者のモデル不足 ・頭痛
- ・最適な大きさの音の提示 ・個人差の大きさ

②特になし

③補聴器装用児と変わらない

③言語の問題

- ・言語力 ・言語発達 ・教科学習 ・言語理解 ・語彙

⑤聴覚活用とコミュニケーション上の問題

- ・コミュニケーション ・言語音の聴取 ・聞き取り ・発音発語指導 ・聴覚活用
- ・傾聴態度

⑥障害認識、障害受容、自己認識の問題

⑦機器管理上の問題

- ・装用習慣 ・運動時の配慮を含む安全管理 ・自宅での活用法

表7-9 指導上の工夫（内容語数）

1. その他（628）
2. 特になし（215）
3. 補聴器装用児と変わらない（102）（クラスタ3+クラスタ38の合計）
4. 環境音や生活音を含めてよく聞くように（41）
5. 言葉は指文字や文字で確認する（35）
6. 明瞭に話すこと、手話などの活用（33）
7. 顔を見ながら話す、傾向態度を育てる（31）
8. 声の大きさ、高さ、速さに注意するように（30）
9. 聴覚活用と言語課題への配慮（29）

※（ ）の数字は、全体内容語1,628語のうち、当該クラスタに出現した内容語の数

- ・視覚的教材や情報の活用と配慮
- ・言語力の指導
- ・手話の活用
- ・言語理解の確認
- ・教科学習
- ・多様なコミュニケーション手段の活用

④聴覚活用とコミュニケーション上の工夫

- ・聴覚活用
- ・コミュニケーション
- ・発音発語指導
- ・話しのかけ方等の工夫
- ・文字、指文字、キューサイン、口声模倣等の活用
- ・傾聴態度
- ・マナー
- ・傾聴態度

⑤障害認識、障害受容

⑥機器管理上の工夫

- ・衝撃への対応
- ・管理知識
- ・機器使用に関する工夫等のアドバイス
- ・運動時の配慮
- ・装用の確認

3) 指導しやすい点

同様に、人工内耳装用幼児児童生徒の指導において、補聴器装用幼児児童生徒に比べて、指導しやすい点をあげてもらった。

その結果、指導しやすい点に関する内容は、合計1,073件の回答があった。1,073件の回答文について、テキストマイニングによるクラスタ分析を行った結果、図7-5のクラスタマップが示された。

1,073件の回答文を分析した結果、1,449の内容語が抽出され、概ね40個のクラスタが作成された。内容語の出現頻度に基づく主なクラスタを表7-10に示す。

特に指導しやすいと思ったり、感じたりしたことがない、または、補聴器装用幼児児童生徒の指導と変わらないという回答が多く見られた。このことは、人工内耳の装用により、聞こえの改善があったとしても、健聴児のように音声のみで完全に指導が行われていないことを示していると思われる。しかし、聴覚活用がしやすい、音韻意識が獲得されやすい、コミュニケーションがとりやすくなり、指導内容が深まる、音声による指導あるいは手話を併用した指導がしやすくなるなどの肯定的な示唆も多く見られている。概ね、聴覚活用とコミュニケーションの面において大きなメリットがあることが示唆され、音の知覚はもちろん、言語指導にも肯定的な影響を及ぼすことが確認できた。

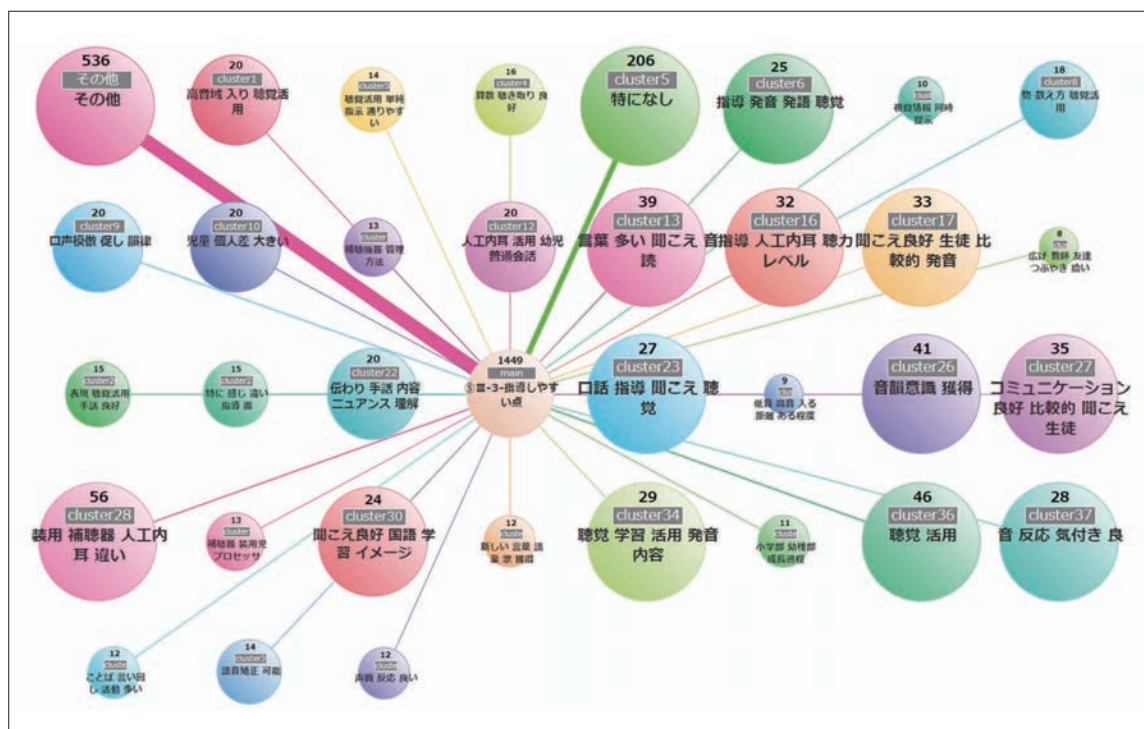


図7-5 指導しやすい点に関するクラスタマップ

表7-10 指導しやすい点（内容語数）

1. 特になし（206）
2. 補聴器装用児の指導と特に変わらない、特に感じない（56）
3. 聴覚活用がしやすい（46）
4. 音韻意識を獲得しやすい（41）
5. 言葉の聞き取りがしやすい、音読指導しやすい（39）
6. 音声コミュニケーションがしやすい（35）
7. 聞き取りやすい、発音が明瞭（33）
8. 手話と口話の併用あるいは口話のみの指導がしやすい（32）
4. 聴覚活用により指導内容が深まる（29）
5. その他（536）

※（ ）の数字は、全体内容語1,440語のうち、当該クラスタに出現した内容語の数

指導しやすい点に関する具体的な回答の内容を以下に示す。

①その他

②補聴器装用児と変わらない、特になし

③言語の面

- ・語彙力が高い ・言語力の育成が容易 ・言語発達が良好
- ・教科学習のメリット ・注意力・思考力の良好

④聴覚活用とコミュニケーション上の工夫

- ・聴覚活用 ・コミュニケーション

- ・音への反応、きづき、聞き取りの良さ
- ・発音発語指導のしやすさ ・発音が良好 ・傾聴態度が良い

⑤機器管理のしやすさ

5. 対象幼児児童生徒について

1) 聴覚障害診断時の年齢について

回答者1,311名の幼児児童生徒における聴覚障害診断時の年齢について、表7-11にまとめた。全体として、図7-6に示すとおり、聴覚障害診断時の乳児幼児児童生徒年齢は1歳未満（0歳）43.6%と1歳17.8%を合わせ 61.4%の乳児幼児児童生徒が概ね1歳まで診断を受けていた。全体の受診時期の平均値も 1.09歳を示しており、1歳までに診断を受ける様子が確認できた。特に、幼稚部においては1歳未満が70.2%、1歳11.8%と合わせて82.0%の幼児が1歳までの診断を受けており、新生児聴覚スクリーニング検査の受診率8割以上（文科省，2019）の実績を裏付ける状況が伺えた。なお、2歳（9.9%）、3歳（4.8%）、5歳以上（1%）の割合を示していることから、概ね聴覚障害の診断は1歳代で8割以上、2歳代で9割以上が診断を受けている現状を反映しているものと思われる。

表7-11 聴覚障害診断時の年齢

対象		年齢								集計結果			
		1歳未満	1歳	2歳	3歳	4歳	5～9歳	10歳以上	無回答	平均値	標準偏差	最小値	最大値
回答人数	1,311	571	234	130	63	7	11	1	294	1.09	1.19	0.00	12.58
%	100.0	43.6	17.8	9.9	4.8	0.5	0.8	0.1	22.4				

他の障害の有無との関連については、図7-7と図7-8に示すように「重複あり」の幼児の1歳台までの診断率は65.8%となっており、「重複なし」の幼児の1歳台までの診断率60.5%に比べて、幾分高い可能性が示されている。重複障害の検査や診断との関連から診断が早まることも一因として考えられる。しかし、障害の有無にかかわらず、平均診断年齢はいずれも1歳台前半を示していた。

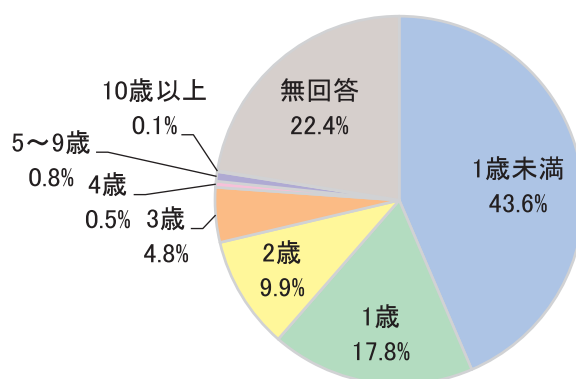


図7-6 診断時の年齢（全体）

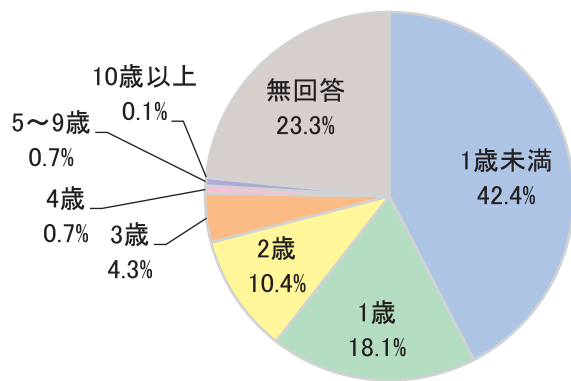


図7-7 診断時の年齢（重複なし）

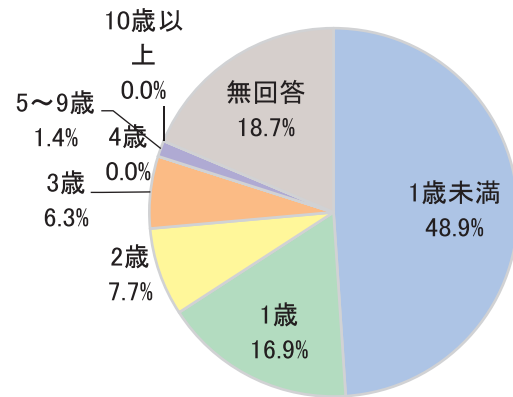


図7-8 診断時の年齢（重複あり）

2) 人工内耳装用状態

(1) 人工内耳装用状態

人工内耳の装用状態を図7-9に示す。右の片耳装用が最も多く、両耳と左の片耳は同程度であった。

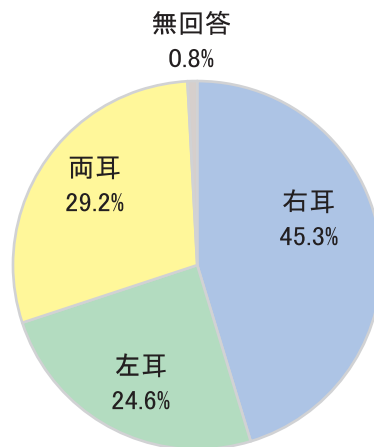


図7-9 人工内耳装用状態（全体）

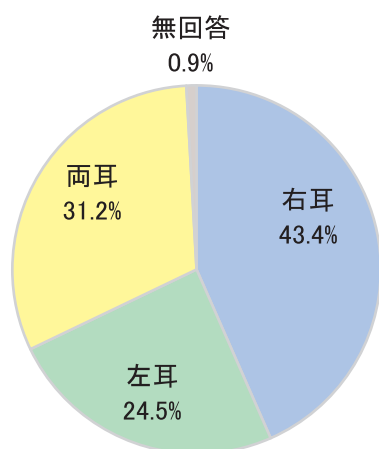


図7-10 人工内耳装用状態（重複なし）

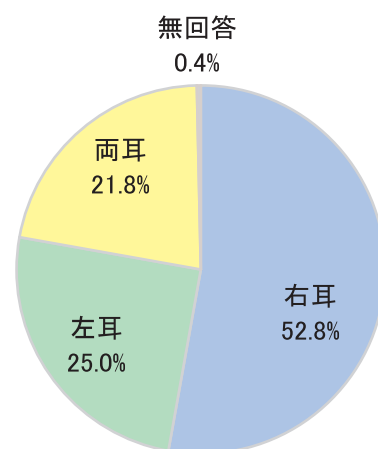


図7-11 人工内耳装用状態（重複あり）

障害の有無別に見た状態の差は、図7-10と図7-11に示すとおり、「重複なし」の場合は、両耳装用が特に多く、聴覚を積極的に活用するための状況があるものと考えられた。「重複あり」

においては、右の片耳装用が多く両耳装用が比較的に少ない傾向が見られた。

(2) 片耳人工内耳装用における補聴器装用状態

全体として、片耳人工内耳装用におけるもう一方の耳の補聴器装用は、51.1%が装用、22.2%が未装用という現状が示された。重複障害の有無によっては未装用の割合は20%台となり、重複障害の有無による相違は見られないが、「重複なし」に比べて「重複あり」の方が、もう一方の耳への補聴器装用率が5%程度高く示された。重複障害を少しでも補うための方策として考えられた。

(3) 学校での補聴援助システム使用の有無

全体として、学校での補聴援助システムの使用は41.1%、不使用は56.4%を示した。「重複なし」ではこの傾向はほとんど変わらないが、「重複あり」では、使用する割合が35.6%、不使用が61.6%になっている。在籍学級や個人の特性によるところが多いと思われるが、「重複あり」における補聴援助システム使用率の低さについては、今後検討を要する。

3) 人工内耳装用開始時期

対象幼児児童生徒全体における人工内耳装用開始時期を、図7-12に示す。

累計割合として、1歳台までが18.9%、2歳台までが44.5%、3歳台までが63.1%、4歳台まで71.6%、10歳までが80.8%となっており、3歳台までで6割以上、4歳台まで7割以上が装用する状況が見られた。

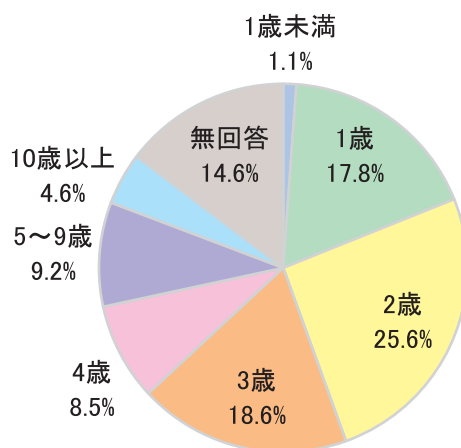


図7-12 人工内耳装用時期（全体）

図7-13と図7-14に示すように、障害の有無による人工内耳装用時期の差はほとんどなく、全体の傾向と同様であった。

4) 人工内耳手術前と装用下での平均聴力レベル

人工内耳装用前の両側耳（裸耳）と人工内耳装用後の両側耳（装用下）の平均聴力レベルを、表7-12に示す。いずれの幼児児童生徒においても、手術前は100dB以上の重度難聴であるが、人工内耳手術により、40dB台の聴力レベルを保持することが示された。障害有無による差は手術前後の平均聴力レベルを示しているものと思われる。人工内耳装用後も平均聴力レベルが40dB台を超えるケースも見られていることから、今後さらに検討する必要があると思われる。

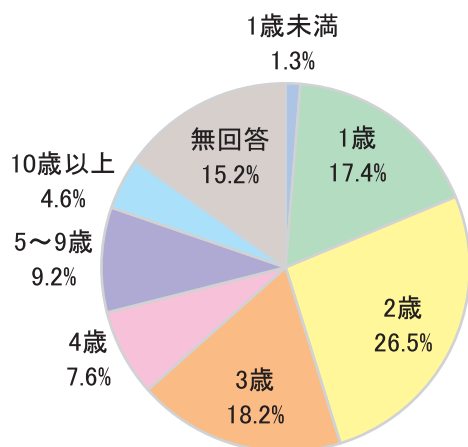


図7-13 人工内耳装用時期（重複なし）

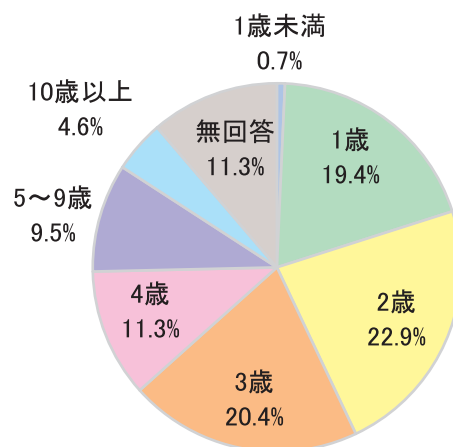


図7-14 人工内耳装用時期（重複あり）

表7-12 手術前後の平均聴力レベル

対象	平均聴力レベル（dBHL）			
	左右耳	手術前（裸耳）	装用後（装用下）	補聴機器装用なしの耳
全体	右耳	111.3	40.2	107.0
	左耳	112.1	43.3	
重複なし	右耳	110.0	39.6	106.9
	左耳	111.5	42.0	
重複あり	右耳	115.7	42.3	107.3
	左耳	114.1	48.3	

5）重複障害の有無とその種類

対象幼児児童生徒1,311名のうち、幼稚部46名、小学部115名、中学部65名、高等部本科53名、高等部専攻科5名の計284名（21.7%）から重複障害を有するとの回答があった。その重複障害の内容（障害種別）を図7-15に示す。全体的に知的障害との重複障害の割合が70.4%と高く、他の障害の割合は10%未満である。

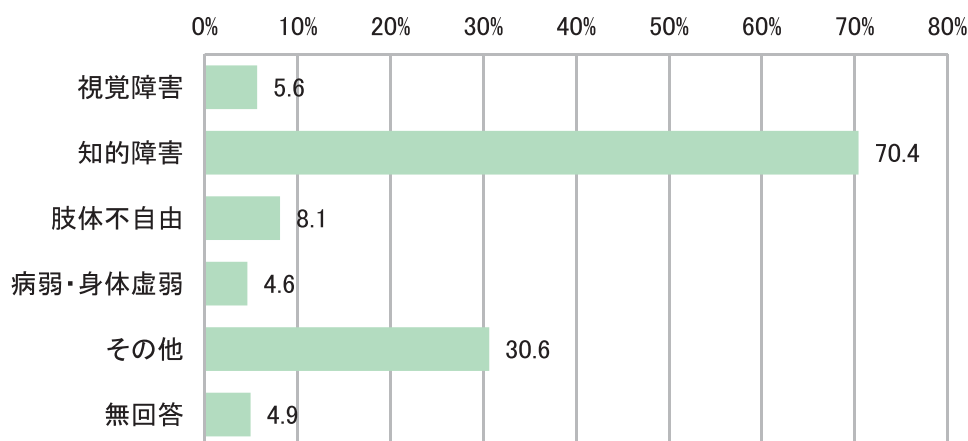


図7-15 重複障害種の内訳

その他の回答の割合が30.6%を占めており、幼稚部15名、小学部30名、中学部28名、高等部本科13名、高等部専攻科2名の計88名であった。記述内容から、ほとんどが発達障害であった。

6) 使用しているコミュニケーションモード

(1) 普段使用しているコミュニケーションモード

全体的にコミュニケーションモードは、図7-16に示す通り、音声、手話、指文字が多く使われていることが確認できた。また、図7-17と図7-18に示すとおり、重複障害の有無にかかわらず、音声、手話、指文字が多用される傾向は変わらないものの、「重複なし」の対象は「重複あり」の対象に比べて、音声の活用率が高いこと、一方で「重複あり」の対象は「重複なし」の対象に比べて、手話の使用頻度が高いことが示された。

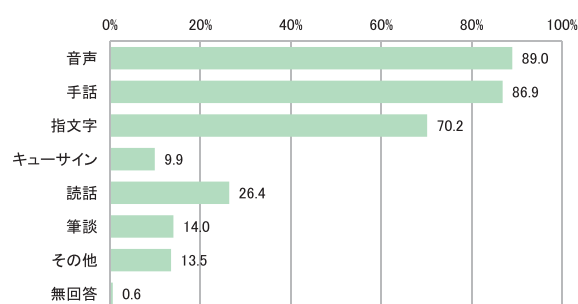


図7-16 普段使用しているコミュニケーションモード（全体）

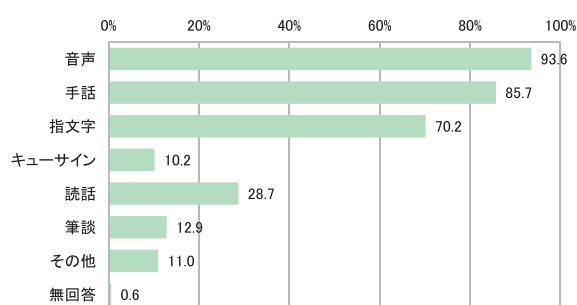


図7-17 普段使用しているコミュニケーションモード（重複なし）

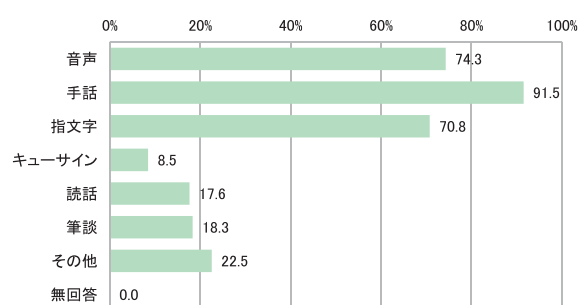


図7-18 普段使用しているコミュニケーションモード（重複あり）

(2) 学習時に主に使用するコミュニケーションモード

学習時に主に使用するコミュニケーションモードについて、最も使用するモード（1番目）とその次に多く使用するモード（2番目）の2つを調べた。

全体的には、図7-19と図7-20に示すとおり、普段多く使用するコミュニケーションモードを反映する形で、1番目に音声59.0%、手話33.6%であった、2番目では、手話46.3%、音声20.6%、指文字16.1%であった。このことから、1番目に音声を使用する人は、2番目に手話や指文字またはその両方を使用する傾向が強く、1番目に手話を使用する人は、2番目に音声か指文字またはその両方を使用する傾向が強いことが示された。

また、重複障害の有無による検討では、図7-21と図7-22に示すように、「重複なし」の場合、1番目に音声65.4%、手話29.7%を、2番目に手話48.5%、音声18.9%、指文字14.8%の順に使用していた。このことから、「重複なし」においては、1番目に音声を使用する人は、2番目に手話や指文字またはその併用を、1番目に手話を使用する人は、2番目に音声や指文字また

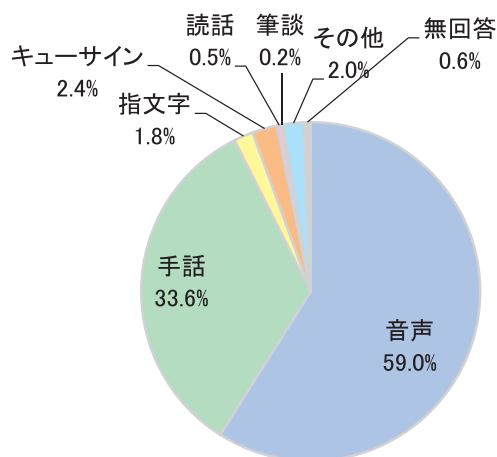


図7-19 学習時のコミュニケーションモード (1番目：全体)

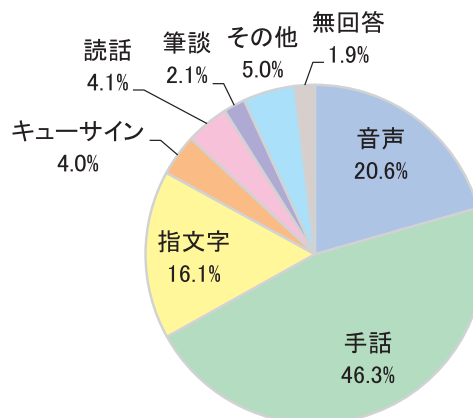


図7-20 学習時のコミュニケーションモード (2番目：全体)

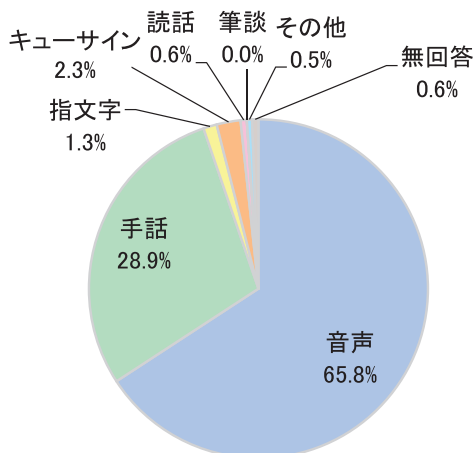


図7-21 学習時のコミュニケーションモード (1番目：重複なし)

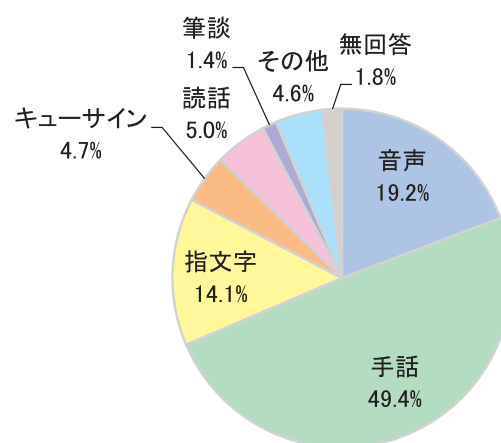


図7-22 学習時のコミュニケーションモード (2番目：重複なし)

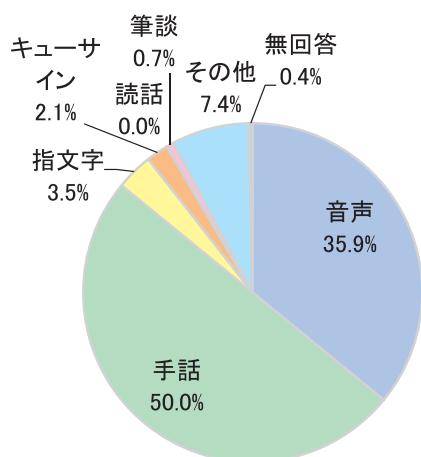


図7-23 学習時のコミュニケーションモード (1番目：重複あり)

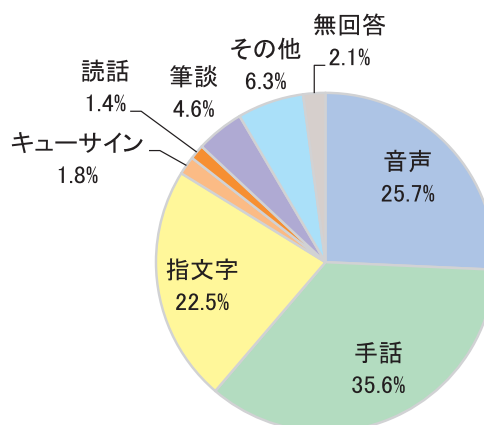


図7-24 学習時のコミュニケーションモード (2番目：重複あり)

はその併用の可能性が高いことが示され、全体的な活用傾向と同様であった。

しかしながら、「重複あり」は、図7-23と図7-24に示すように、1番目に手話51.6%、音声35.3%、2番目に、手話35.3%、音声25.5%、指文字22.9%の順であった。このことから、「重複あり」において、1番目に手話を使用する人は、2番目に音声指文字またはその組み合わせ

を、1 番目に音声を使用する人は、2 番目に手話と指文字またはその組み合わせを使用する傾向が強いことが示唆された。

(3) 普段使用するコミュニケーションモードのその他の内容

その他の割合は、全体では13.5%であった。「重複なし」の幼稚部26.5%、「重複あり」の幼稚部58.7%、小学部23.5%、高等部専攻科20.0%と、平均値を上回っていた。

その内容は、重複障害の有無に関係なく、絵、絵カード、イラスト、写真、実物などの視覚的教材、身ぶり、ジェスチャー、視線、指さし、表情、行動などの身体表現、発音（誘導）サイン、音韻サイン、口形、音声などの音声を読み取るもの、文字、要約筆記などの文字活用、SNS、iPad、ソフト、FMマイクなどのツールなどの利用が示された。

7) 家族構成

家族構成は、きょうだいの有無と聴覚障害近親者の有無について調べた。

全体的に、約80%の幼児児童生徒にきょうだいがいること、聴覚障害近親者は14%程度であることが示された。

重複障害の有無による分析では、「重複なし」が、きょうだいの割合が若干高く、聴覚障害近親者の割合も若干高い可能性があるが、障害の有無に関係なく、いずれの対象においても、70%以上きょうだいがおり、聴覚障害近親者も、通常の出現頻度内の割合を示していた。

8) 学校歴

(1) 学校歴について

学校歴に関しては、現在籍をおく学部を含む学校歴について、複数回答が可能な形式で調べた。対象となった1,311の幼児児童生徒は、現状として特別支援学校（聴覚障害）の各学部に在籍する幼児児童生徒であり、全体的に、学部が上がるにつれて、特別支援学校（聴覚障害）に在籍する割合は高くなっていった。

全体的な傾向については、表7-13に示すとおり、乳児期に特別支援学校（聴覚障害）の教育相談に通っていた割合は63.3%、幼稚部に在籍した割合は73.7%、小学部在籍は82.5%、中学部は87.9%、高等部本科と高等部専攻科は96.6%であった。

「重複なし」の傾向については、表7-14に示すとおり、乳児期に特別支援学校（聴覚障害）の教育相談に通っていた割合は65.1%、幼稚部に在籍した割合は73.3%、小学部在籍は80.7%、中学部86.9%、高等部本科と高等部専攻科は97.0%であり、全体的傾向の割合とほとんど同様の結果が示された。

重複障害の有無による大きな変化はないものの、表7-14と表7-15に示す通り、「重複なし」の乳幼児に比べて、「重複あり」の場合は、乳幼児期における支援・教育組織との連携が、特別支援学校に限らず、難聴幼児通園施設など、少し幅広く行われていることが示唆された。

9) 学校歴におけるその他の内訳

表7-13～表7-15に示すように、全体におけるその他の割合は、乳児期16.3%、幼児期3.8%、児童期2.0%、少年期1.1%、青年期1.0%と、乳児期は比較的高い割合を示しているものの、幼児期以降は、低い割合を示していた。

①乳児期段階

乳児期における特別支援学校（聴覚障害）、児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）

表7-13 学校歴（全体） 複数回答

	学校種	回答数	%
乳児期	特別支援学校（聴覚障害）	775	63.3
	児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）	249	20.3
	その他	200	16.4
	計	1,224	100.0
幼児期	特別支援学校（聴覚障害） 幼稚園	1,115	73.7
	幼稚園	91	6.0
	保育所	143	9.5
	児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）	106	7.0
	その他	57	3.8
	計	1,512	100.0
児童期	特別支援学校（聴覚障害） 小学部	871	82.5
	小学校（通常学級）	85	8.0
	小学校（特別支援学級（難聴））	78	7.4
	その他	22	2.1
	計	1,056	100.0
少年期	特別支援学校（聴覚障害） 中学部	494	87.9
	中学校（通常学級）	33	5.9
	中学校（特別支援学級（難聴））	29	5.2
	その他	6	1.1
	計	562	100.0
青年期	特別支援学校（聴覚障害） 高等部	286	96.6
	高等学校	7	2.4
	その他	3	1.0
	計	296	100.0
無回答		3	

表7-14 学校歴（重複なし） 複数回答

	学校種	回答数	%
乳児期	特別支援学校（聴覚障害）	610	65.1
	児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）	180	19.2
	その他	147	15.7
	計	937	100.0
幼児期	特別支援学校（聴覚障害） 幼稚園	860	73.3
	幼稚園	71	6.1
	保育所	111	9.5
	児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）	71	6.1
	その他	30	2.6
	計	1,173	100.0
児童期	特別支援学校（聴覚障害） 小学部	640	80.7
	小学校（通常学級）	76	9.6
	小学校（特別支援学級（難聴））	63	7.9
	その他	14	1.8
	計	793	100.0
少年期	特別支援学校（聴覚障害） 中学部	370	86.9
	中学校（通常学級）	30	7.0
	中学校（特別支援学級（難聴））	23	5.4
	その他	3	0.7
	計	426	100.0
青年期	特別支援学校（聴覚障害） 高等部	226	97.0
	高等学校	7	3.0
	その他	0	0.0
	計	233	100.0
無回答		0	

表7-15 学校歴（重複あり） 複数回答

	学校種	回答数	%
乳児期	特別支援学校（聴覚障害）	157	57.1
	児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）	65	23.6
	その他	53	19.3
	計	275	100.0
幼児期	特別支援学校（聴覚障害） 幼稚部	241	68.7
	幼稚園	19	5.4
	保育所	31	8.8
	児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）	34	9.7
	その他	26	7.4
	計	351	100.0
児童期	特別支援学校（聴覚障害） 小学部	216	88.2
	小学校（通常学級）	9	3.7
	小学校（特別支援学級（難聴））	13	5.3
	その他	7	2.9
	計	245	100.0
少年期	特別支援学校（聴覚障害） 中学部	116	90.6
	中学校（通常学級）	3	2.3
	中学校（特別支援学級（難聴））	6	4.7
	その他	3	2.3
	計	128	100.0
青年期	特別支援学校（聴覚障害） 高等部	56	94.9
	高等学校	0	0.0
	その他	3	5.1
	計	59	100.0
無回答		3	

の他のその他の内容は、ほとんどが保育園（保育所）であった。幼稚部の選択肢には、保育所を設けていることから、幼稚部段階の全体におけるその他の割合は57件（3.8％）と減っていることから、設問設計の問題が指摘できる。保育所以外に、自宅、私立病院の言語指導室、療育相談センター、市の特別支援センター、職場の託児所が示された。重複障害の有無による違いは特に示されなかった。

②幼児期段階

幼児期における特別支援学校（聴覚障害）幼稚部、児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）、幼稚園、保育所の他のその他の内容は、児童発達センターを示す異なる名称の施設、例えば、児童発達センター、聴覚福祉センター、地域療育センターなどが記されていた。特別支援学校（聴覚障害）幼稚部の通級という回答も見られた。「重複あり」の場合は、他の障害に関連する施設、例えば、特別支援学校（視覚障害）幼稚部、知的障害幼児通園施設、肢体不自由施設、発達障害や情緒障害関連の支援センターの名称も見られていた。

③児童期段階

児童期における特別支援学校（聴覚障害）小学部、小学校（通常学級）、小学校（特別支援学級（難聴））以外のその他の内容は、通級指導教室（難聴）が多く、続いて、小学校から特別支援学校（聴覚障害）小学部へ転校が多く見られた。

④少年期段階

少年期における特別支援学校（聴覚障害）中学部、中学校（通常学級）、中学校（特別支

援学級（難聴））以外のその他の内容は、数は少ないが、中学校から特別支援学校（聴覚障害）中学部への転校、他の障害種の特別支援学校からの転校が記されていた。

⑤青年期段階

青年期における特別支援学校（聴覚障害）高等部、高等学校以外のその他の内容は、数は極めて少ないが、通常の高等学校から特別支援学校（聴覚障害）高等部への転校、あるいは他の障害種の特別支援学校からの転校が記されていた。

10) 今後の進路

(1) 全体の傾向

今後の進路に関する全体的な傾向としては、表7-16のとおり、乳幼児教育相談と幼稚部から小学部への進路希望が約67.2%、小学部から中学部へは80.3%、中学部から高等部本科へは73.0%、高等部本科と高等部専攻科からは、大学等への進学が44.7%、就職が55.3%であった。

大学等への進学の内訳は、一般大学が14.8%、その他の大学が13.0%、筑波技術大学5.9%、高等専門学校2.5%、特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科8.5%の順であった。就職等の進路は、一般会社等への就職が42.9%、その他の就職11.6%、職業能力開発校0.8%の順であった。

表7-16 今後の学校歴（全体） 複数回答

学校種		回答数	%
小学校	特別支援学校（聴覚障害）小学部	349	67.2
	小学校（通常学級）	79	15.2
	小学校（特別支援学級（難聴））	54	10.4
	その他	37	7.1
	計	519	100.0
中学校	特別支援学校（聴覚障害）中学部	350	80.3
	中学校（通常学級）	28	6.4
	中学校（特別支援学級（難聴））	13	3.0
	その他	45	10.3
高等学校	特別支援学校（聴覚障害）高等部	406	73.0
	高等学校	78	14.0
	その他	72	12.9
	計	556	100.0
大学	特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科	67	8.5
	高等専門学校	20	2.5
	筑波技術大学	46	5.9
	一般大学	116	14.8
	その他	102	13.0
就職・その他	計	351	(44.7)
	就職	337	42.9
	職業能力開発校	6	0.8
	その他	91	11.6
大学 就職・その他	計	434	(55.3)
	大学	785	100.0
無回答		124	

重複障害の有無による今後の進路は、表7-17と表7-18に示すように、「重複なし」が小学部から高等部に至るまで、特別支援学校（聴覚障害）を希望する割合は60-70％であり、通常の小中高等学校への進学希望が12-30％であるのに対して、「重複あり」の場合は、特別支援学校（聴覚障害）への進学希望は、特別支援学校小中高等部に至るまで、常に80％以上、通常の小中高等学校への進学希望は5％未満という違いが示された。特別支援学校（聴覚障害）高等部あるいは高等学校からの進路にも差が見られ、「重複なし」の場合は、大学等への進学が44.6％、就職等が55.1％に対して、「重複あり」は、大学等への進学は23％、就職等への希望が77％を示した。

表7-17 今後の学校歴（重複なし） 複数回答

学校種		回答数	%
小学校	特別支援学校（聴覚障害）小学部	274	64.3
	小学校（通常学級）	77	18.1
	小学校（特別支援学級（難聴））	51	12.0
	その他	24	5.6
	計	426	100.0
中学校	特別支援学校（聴覚障害）中学部	262	78.2
	中学校（通常学級）	27	8.1
	中学校（特別支援学級（難聴））	13	3.9
	その他	33	9.9
	計	335	100.0
高等学校	特別支援学校（聴覚障害）高等部	302	71.7
	高等学校	73	17.3
	その他	46	10.9
	計	421	100.0
大学	特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科	57	9.1
	高等専門学校	19	3.0
	筑波技術大学	42	6.7
	一般大学	109	17.4
	その他	84	13.4
	計	311	(49.8)
就職・その他	就職	258	41.3
	職業能力開発校	4	0.6
	その他	52	8.3
	計	314	(50.2)
大学 就職・その他		625	100.0
無回答		92	

表7-18 今後の学校歴（重複あり） 複数回答

学校種		回答数	%
小学校	特別支援学校（聴覚障害）小学部	73	81.1
	小学校（通常学級）	2	2.2
	小学校（特別支援学級）	2	2.2
	その他	13	14.5
	計	90	100.0
中学校	特別支援学校（聴覚障害）中学部	83	87.4
	中学校（通常学級）	0	0.0
	中学校（特別支援学級）	0	0.0
	その他	12	12.6
	計	95	100.0
高等学校	特別支援学校（聴覚障害）高等部本科	101	77.7
	高等学校	5	3.8
	その他	24	18.5
	計	130	100.0
大学	特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科	9	5.9
	高等専門学校	1	0.7
	筑波技術大学	3	2.0
	一般大学	5	3.3
	その他	17	11.2
	計	35	(23.0)
就職・その他	就職	77	50.7
	職業能力開発校	2	1.3
	その他	38	25.0
	計	117	(77.0)
大学 就職・その他		152	100.0
無回答		28	

(2) 今後の進路の希望におけるその他の内訳

表7-16に示すように、全体におけるその他の割合は、小学校7.1%、中学校10.3%、高等学校12.9%、大学等13.0%、就職等11.6%の割合を示していた。

その他の内訳を、学年別等に分け、以下に示す。

①小学校

乳児期及び幼児期における小学校段階の希望する進路は、特別支援学校（聴覚障害）小学部、小学校（通常学校）、小学校（特別支援学級（難聴））の他、その他の内容としては、「重複なし」は、未定の回答がほとんどであったが、「重複あり」は、ほとんどが、知的障害に代表される他の障害種の特別支援学校であった。

②中学校

小学校期におけるにおける中学校段階の希望する進路は、特別支援学校（聴覚障害）中学部、中学校（通常学校）、中学校（特別支援学級（難聴））の他、その他の内容としては、「重複なし」は、未定の回答が一番多く、通級指導教室（難聴）という回答も少数ではあるが見られた。「重複あり」は未定も多いが、知的障害に代表される他の障害種の特別支援学校との回答も見られた。

③高等学校

中学校期におけるにおける高等学校段階の希望する進路は、特別支援学校（聴覚障害）高等部、高等学校の他、その他の内容としては、「重複なし」は、未定の回答がほとんどであったが、専門学校という回答も見られた。「重複あり」は、未定が一番多く、その次に、知的障害、病弱、肢体不自由などの他の障害種の特別支援学校との回答も見られた。

④大学等

高等学校期における特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科、高等専門学校、筑波技術大学、一般大学以外のその他の内容は、「重複なし」は、未定が一番多く、続いて、専門学校という回答が多く見られた。「重複あり」は、未定が一番多いものの、作業所、通所施設、就労支援施設等の回答も見られた。

⑤就職等

高等学校期における就職、職業能力開発校以外のその他の内容は、「重複なし」は、未定が一番多く、続いて、就労支援の活用、専門学校という回答も見られた。「重複あり」は、聾重複センター、就労支援事業所、作業所、職業訓練校などの、福祉支援就業や福祉サービスの活用が一番多く、続いて、不明や未定が多かった。

11) 聴覚活用の状態

(1) 聴覚活用の状態の評価について

聴覚活用の状態は、①音への気付き、②言語音の聞き取り、③傾聴態度の側面から、それぞれについて5段階で評価を行った。その結果を表7-19に示した。

表7-19 聴覚活用の状態

		極めて良い (5点)	良い (4点)	どちらとも 言えない(3点)	あまり良く ない(2点)	良くない (1点)	無回答	平均評定値
音への気付き	全体	22.90	51.90	13.80	6.80	4.00	0.70	3.83
	重複なし	25.40	54.20	12.20	5.10	2.80	0.40	3.95
	重複あり	14.10	43.70	20.10	13.00	8.10	1.10	3.43
言語音の聞き取り	全体	10.80	2.30	24.10	13.00	8.80	1.10	3.34
	重複なし	12.70	45.80	23.20	11.50	6.00	0.80	3.48
	重複あり	4.20	30.30	27.50	18.30	18.30	1.40	2.84
傾聴態度	全体	15.10	38.40	23.80	16.90	4.90	1.00	3.42
	重複なし	18.30	41.70	22.40	13.70	3.10	0.80	3.59
	重複あり	4.20	27.10	28.90	27.50	10.90	1.40	2.86

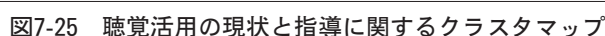
まず、音への気付きは、全体的に74.8%が良い評価であったが、10.8%が良くない評価であった。

「重複なし」では、79.6%が良い、7.9%が良くない評価、「重複あり」では、57.8%が良い、21.1%が良くない評価であった。音への気付きを単なる音の受容ではなく、音に対する基礎的な認知作用として考えると、主に知的な障害によるこの段階からの認知作用から、その違いが見られるといえよう。

言語音の聞き取りは、全体的に53.1%が良い評価であったが、21.8%が良くない評価であった。「重複なし」では、58.5%が良い、17.5%が良くない評価、「重複あり」では、34.5%が良い、36.6%が良くない評価であった。言語音の聞き取りは、音の聴取のみならず、言語力に基づく理解が必要であることから、学部段階別の検証が必要であるが、「重複なし」も良くない

「重複なし」では、60.0%が良い、16.8%が良くない評価、「重複あり」では、31.3%が良い、38.4%が良くない評価であった。この傾向態度の割合と言語音の聞き取りとの割合が近似しており、今後、両方の関連について調べる必要があると思われる。

聴覚活用に関する指導の現状と課題については、合計1,093件の回答があった。1,093件の回答文について、テキストマイニングによるクラスタ分析を行った結果、図7-25のような、クラスタマップが示された。



生活態度の明るさ、音楽や楽器音の聞き取りの練習、トータルコミュニケーションの必要性など、様々な意見に関するその他の他に、現状として多くあげられたのは、環境音や音声の音の受容の良さ、それに伴うコミュニケーションのしやすさが示される一方、環境音や音声の聞き取りは良いものの、傾聴態度が身につかず、言葉としての理解が不十分であること、従って、コミュニケーションには音声のみならず、手話や指文字などの視覚的手かかりや情報が必要であることが指摘されている。

表7-20 聴覚活用の現状と課題（内容語数）

1. その他（745）
2. 聞き手を見ない、顔を見ながら話さない（63）
3. 人工内耳の活用、聴覚活用（54）
4. 言葉としての聞き取りが困難（51）
5. 聴覚のみの活用が難しく、他のコミュニケーション手段を併用（47）
6. 音声によるコミュニケーションができる（46）
7. 傾聴態度の育成（44）
8. 聴覚活用がよくできている（44）
9. 音の受容はいいが、言葉の聞き取りや理解が困難（43）
10. 音声以外に、視覚的情報が必要（41）
11. 聞き取りは良いが、その通りに行動できない、音に対する集中力が途切れる（40）

※（ ）の数字は、全体的内容語2,075語のうち当該クラスに出現した内容語の数

12) 言語活動

(1) 言語活動に関する評価について

幼児児童生徒の言語力（幼稚部は口頭による言語活動、他の学部は読み書き）について、同年齢の健聴の幼児児童生徒の平均値に比べて、①文法力、②文章理解力、③作文力について、それぞれ5段階の評価を行った。その結果を表7-21に示す。

全体的に、いずれの言語力においても、健聴の幼児児童生徒に比べて、平均同等以上は20～25％程度、低いのは70～80％程度であった。「重複なし」の場合は、概ね全体の傾向を裏付けていたが、「重複あり」は、健聴の幼児児童生徒に比べて、平均同様以上は4～7％程度に留まっており、低いのが90％以上を占めていた。言語力には、重複障害の影響が強く反映されていること、重複なしの幼児児童生徒の場合も、全般的に言語力が低いレベルに留まっているといえる。

表7-21 言語活動（読み書き力）

		高い (5点)	やや高い (4点)	同じくらい (3点)	やや低い (2点)	低い (1点)	無回答	平均評定値
文法力	全体	1.80	4.60	17.80	30.30	43.70	1.80	1.89
	重複なし	2.20	5.80	21.80	32.80	36.30	1.10	2.04
	重複あり	0.70	0.40	4.20	21.10	70.10	3.50	1.35
文章理解力	全体	2.40	5.10	19.10	29.90	41.80	1.70	1.95
	重複なし	2.80	6.50	23.00	33.00	33.60	1.10	2.11
	重複あり	1.10	0.40	5.30	19.00	70.80	3.50	1.36
作文力	全体	1.80	3.60	19.90	28.10	42.90	3.70	1.89
	重複なし	2.10	4.70	24.20	30.70	35.10	3.30	2.05
	重複あり	0.70	0.00	3.90	19.40	71.10	4.90	1.31

(2) 言語活動（読み書き）に関する指導の現状と課題

言語活用（読み書き）の現状と課題については、合計1,132件の回答があった。1,132件の回答文について、テキストマイニングによるクラスタ分析を行った結果、図7-26のような、クラスタマップが示された。

1,132件の回答文を分析した結果、2,266の内容語が抽出され、概ね40個のクラスタが作成された。内容語の頻度に基づく、主なクラスタを表7-22に示す。

現状や課題として、受け身文の活用が難しい、語彙が少ない、客観的に理解を進めることが

難しいなど、様々な意見に関するその他の他に、現状と課題として多くあげられたのは、言葉を通した表現力や伝達力の問題、文章の理解や構成の問題、助詞や文法力の不足などの問題が指摘されており、これらの点を中心に指導が展開されていると推察できる。一方、手話や指文字などの使用に関しては、コミュニケーションを助ける意味で、積極的な活用を促す見方が多かった。

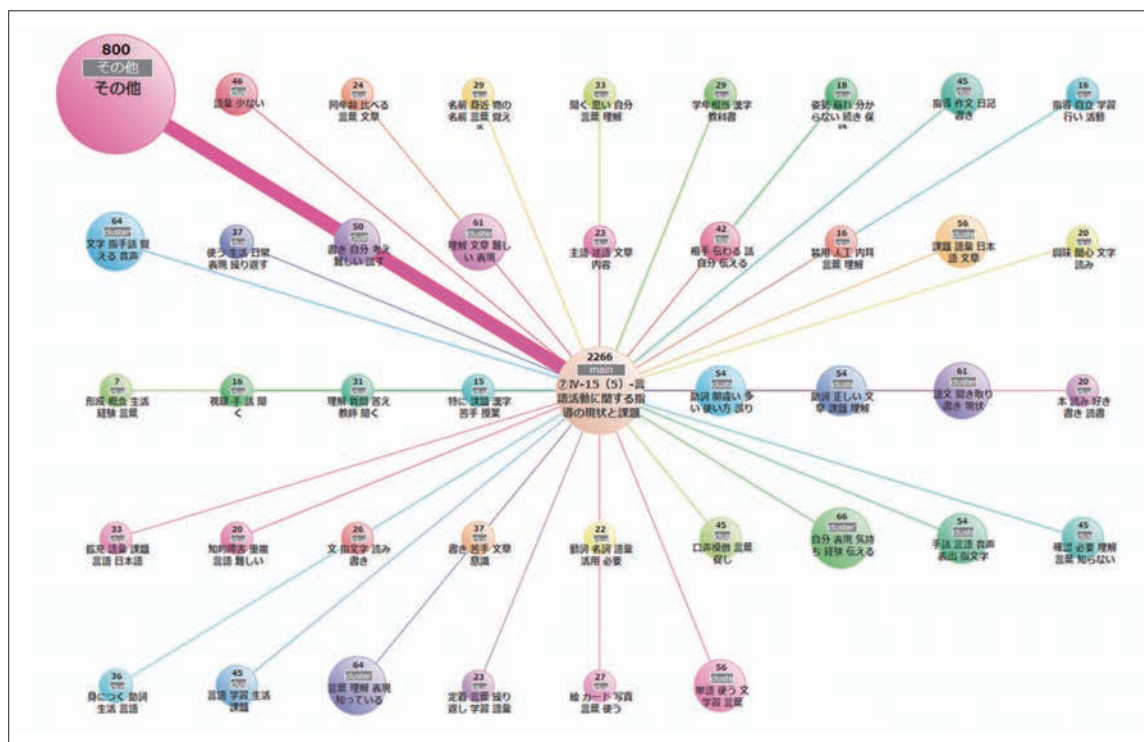


図7-26 言語活動の現状と指導に関するクラスタマップ

表7-22 言語活動の現状と課題（内容語数）

1. その他（800）
2. 自分の考えや思いを表現する力、感情や経験を伝えることに課題（66）
3. 言葉による表現力、理解語彙の問題（64）
3. 手話言語が先行し、手話や指文字と音声言語が一致しない（64）
5. 文章の理解と構成に課題、長文理解に課題（61）
5. 4語文以上の文章の聞き取りに課題（61）
7. 簡単な単語でのやりとりが多い、定型文の活用に困難さ（56）
8. 活用や助詞の誤り、文法力の課題（54）
8. 身ぶりや手話でのコミュニケーションが先行する（54）
8. 助詞の誤りが多い（54）

※（ ）の数字は、全体内容語2,266語のうち当該クラスタに出現した内容語の数

6. 幼児児童生徒の学校での学習と生活

幼児児童生徒の学校での学習と生活については、1）学業成績（幼児を除く）、2）学習態度、3）コミュニケーション能力、4）学校生活、5）学校での行動に関する5つの側面（3

題) から、同年齢の健聴児と比較した場合の評価を5段階評定により行った。なお、3題の合計評定点が一定評定点以下(8または9点以下)の場合は、その理由の記載を求めた。

1) 学業成績(幼児を除く)

幼児を除く児童生徒の学業成績については、「健聴児と比べた学業成績の程度」、「潜在力に照らしあわせた学業成績の程度」、「読書力の程度」の3つの項目について、5段階で評価し、3つの評価項目の合計点が平均以下(9点以下)の場合、児童生徒の現状と課題について記述を求めた。

(1) 3つの項目の評価について

学業成績に関する3つの項目の評価結果を、表7-23に示す。

全体的には、同年齢の健聴の児童生徒に比べると、潜在的な学業能力は、6割以上が同等以上、1割強が低い評価に留まっている。「重複あり」も、6割弱がその可能性を認めている。しかし、学業成績の現状では、全体として5割以上が健聴の児童生徒より低く、同等以上は2割強に留まっている。重複障害の存在により、このような傾向はさらに顕著である。読書力は、学業成績の現状を反映した結果となっている。なお、全体的に無回答の割合が2割と高い数値が示されている。評価しにくいという回答なのか、評価できないという回答なのか、評価そのものに対する疑問なのか、今後検討する必要がある。

表7-23 学業成績の現状

健聴児との比較	高い (5点)	少し高い (4点)	同じぐらい (3点)	少し低い (2点)	低い (1点)	無回答	平均評定値
全体	1.60	4.60	17.50	24.60	28.80	23.00	2.03
重複なし	2.00	5.60	21.40	26.60	20.00	24.40	2.25
重複あり	0.40	0.70	3.50	16.50	59.90	19.00	1.33
潜在力との比較	同じぐらい (5点)	やや低い (4点)	低い (3点)	かなり低い (2点)	比較できない ほど低い(1点)	無回答	平均評定値
全体	28.00	20.80	16.20	7.90	3.70	23.40	3.80
重複なし	28.60	21.60	16.20	6.80	1.90	24.90	3.91
重複あり	25.00	18.30	15.80	12.00	9.90	19.00	3.45
読書力	高い (5点)	少し高い (4点)	同じぐらい (3点)	少し低い (2点)	低い (1点)	無回答	平均評定値
全体	2.00	5.30	16.10	21.70	31.70	23.20	2.01
重複なし	2.40	6.70	19.70	23.20	23.40	24.60	2.22
重複あり	0.70	0.70	2.80	16.90	59.90	19.00	1.34

(2) 平均以下の児童生徒の現状と課題

3つの学業成績に係わる総合評価を表7-24に示す。全体として2割の児童生徒が学業成績の面において、健聴の児童生徒と同様の評価を得ているものの、約5～7割強の児童生徒が、学業に関するサポートを必要としている結果が示されているといえる。なお、健聴の児童生徒と同等以上の2割の児童生徒も、特別支援学校での学習があつての現状であることを考慮する必要があると思われる。

表7-24 学業成績の総合評価

学業成績（全体）	9点以下	10点以上	無回答	平均評定値
全体	54.10	22.00	23.90	7.87
重複なし	47.80	27.00	25.30	8.40
重複あり	75.70	4.60	19.70	6.13

(3) 学習指導の現状と課題について

学業成績が9点以下の児童生徒に対する学習指導の現状と課題については、合計653件の回答があった。653件の回答文について、テキストマイニングによるクラスタ分析を行った結果、図7-27のようなクラスタマップが示された。

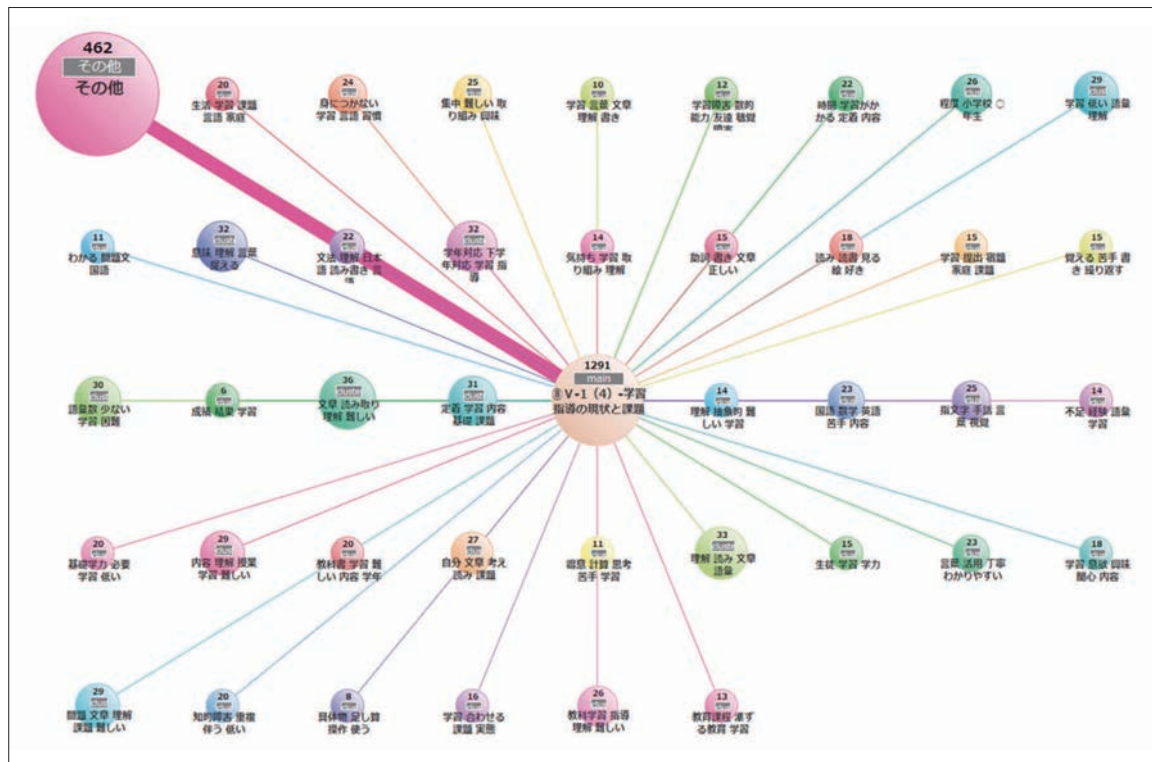


図7-27 学習指導の現状と課題に関するクラスタマップ

653件の回答文を分析した結果、1,291の内容語が抽出され、概ね40個のクラスが作成された。内容語の頻度に基づく主なクラスを表7-25に示す。

表7-25 学習に課題を抱えている幼児児童生徒に対する学習指導の現状と課題（内容語数）

1. その他（462）
2. 文章の読み取りが難しく、学習に困難をきたしている（36）
3. 言葉や文の理解に困難（32）
3. 学年対応の学習が難しく、下学年対応で授業を行っている（32）
5. 基礎事項も含めて、学習した内容の定着が難しい（31）
6. 獲得した語彙が少なく、学習内容の理解が困難（30）
7. 授業内容が理解できない（29）
7. 教科書の文章や算数文章題の理解が困難で学習が進まない（29）
7. 語彙力、読解力に課題があり、学習が難しい（29）
10. 自分の考えるうまく表現できず、授業中に答えられない（27）

※（ ）の数字は、全体内容語1,291語のうち当該クラスタに出現した内容語の数

現状と課題として、「曖昧な発言が多い」、「美術は得意だがほかの教科は評価が低い」、「社会の仕組みや理科の実験などに使われる抽象的概念の獲得に課題がある」など、様々な意見に関するその他のほかに、多くあげられたのは、語彙力、文や文章の理解力や表出力の問題があり、学習そのものに支障を来しているといった内容であった。

学年別および重複障害の有無別の学習の現状と課題に関する記述の一部を以下に示す。

①小学部

「重複なし」

- ・音韻意識が未熟、書く課題が非常に困難
- ・計算問題は解けるが、文章題課題は難しい
- ・語彙力不足による学習上の困難さ
- ・文法力の弱さに起因する国語教科学習の難しさ
- ・学習内容の理解に時間が掛かる
- ・生活言語に比べて学習言語が不足
- ・学習した内容の定着に時間がかかる
- ・学習した内容はよく覚えているが、それを用いて活用するのは難しい
- ・読みを読む習慣の不足
- ・全般的に言語力が学年相応ではなく、幾分遅れている
- ・学習の手順やポイントをわかりやすいことばで繰り返し提示し、学習させる

「重複あり」

- ・興味のある内容について、スケジュールボードなどにより、学習の順序を提示
- ・ことばの学習に困難を示しており、丁寧な指導が必要
- ・手話でわかることばが指文字ではわからない
- ・語彙力が不足、ことばの定着に時間がかかる
- ・手話、指文字、文字等の視覚的情報を活用しながら、強化・領域をあわせた指導
- ・視覚的教材を用いた語彙の拡充指導

- ・集中と持続が難しい
- ・物語の音読と劇化による言語指導
- ・体験学習を多く取り入れ、体験したことを学習に結びつける工夫
- ・暗記は得意だが、学習したことばを用いて思考することは難しい
- ・自分の思いや要望を他人に伝えられるように練習
- ・記憶力が著しく低く、それを補うための教材等の工夫が必要

②中学部

「重複なし」

- ・基礎学力の定着
- ・学習意欲・学習習慣の形成
- ・国語力、言語力全般
- ・文章読解、文章理解
- ・語彙力
- ・注意力、集中力
- ・思考の難しさ
- ・教科学習の不十分さによる学力の差

「重複あり」

- ・基礎学力の定着
- ・言語力、語彙力
- ・学習意欲・学習習慣
- ・注意力・集中力
- ・書く力
- ・文章理解

③高等部

「重複なし」「重複あり」

- ・日本語指導
- ・論理的抽象的思考力
- ・学習の定着、反復学習
- ・反復学習による言語の定着
- ・下学年指導
- ・視聴覚教材
- ・手話の活用

2) 学習態度について

学習態度については、「注意散漫の程度」、「注意持続時間の程度」、「口頭指示に対する反応」の3つの項目について、5段階で評価し、3つの評価項目の合計点が平均以下（8点以下）の場合、幼児児童生徒の現状と課題について記述を求めた。

(1) 3つの項目の評価について

学習態度に関する3つの評価項目の結果を、表7-26に示す。

全体的には、注意散漫の程度や注意持続時間の程度は、同年齢の健聴の幼児児童生徒に比べると、5割強は同等以上、5割弱は不十分さを指摘する結果となった。口頭指示に対する躊躇や戸惑いも、6割以上が同等以上、3割強が多い評価に留まっている。

このような全体の傾向は、「重複なし」の幼児児童生徒においてはその割合がさらに高くなる傾向が示されるが、一方で「重複あり」の幼児児童生徒の場合は、3割の幼児児童性が同等以上、6割以上が多い結果が示されている。「重複あり」は、重複障害からくる学習態度上の問題があると思われるが、「重複なし」の5割の不十分さの原因についてはさらに追求する必要があると思われる。

表7-26 学習態度の現状

注意散漫	ほとんどない (5点)	少しある (4点)	同じぐらい (3点)	少し多い (2点)	多い (1点)	無回答	平均評定値
全体	16.70	11.80	24.60	24.40	20.00	2.50	2.80
重複なし	19.50	12.80	27.90	24.20	13.70	1.90	3.00
重複あり	7.00	8.50	13.00	25.70	41.20	4.60	2.10
注意持続	長い (5点)	少し長い (4点)	同じぐらい (3点)	少し短い (2点)	短い (1点)	無回答	平均評定値
全体	7.20	6.40	36.10	27.30	20.70	2.30	2.51
重複なし	8.70	7.40	41.40	26.60	14.10	1.80	2.70
重複あり	2.50	3.20	17.30	30.30	43.00	3.90	1.88
口頭指示の遂行	ない (5点)	ほとんどない (4点)	時々ある (3点)	やや多い (2点)	多い (1点)	無回答	平均評定値
全体	6.10	19.50	36.40	20.10	15.40	2.60	2.80
重複なし	6.30	23.00	39.60	18.70	10.40	1.90	2.96
重複あり	5.30	8.10	23.90	24.30	33.80	4.60	2.23

(2) 平均以下の幼児児童生徒の現状と課題

3つの学習態度に関する総合評価を表7-27に示す。全体として半数近くの幼児児童生徒が学習態度の面において、健聴の幼児児童生徒と同様の評価を得ているものの、約半数の幼児児童生徒が、この面でのサポートを必要としている結果が示された。「重複あり」の幼児児童生徒においては7割以上が何らかのサポートを必要としていることが示された。

表7-27 学習態度の総合評価

学習態度（全体）	8点以下	9点以上	無回答	平均評定値
全体	48.50	48.30	3.20	8.13
重複なし	41.70	5.90	2.40	8.67
重複あり	72.20	22.20	5.60	6.23

(3) 学習態度の現状と課題について

学習態度の評定値が8点以下の幼児児童生徒に対する学習態度の現状と課題については、合計609件の回答があった。609件の回答文について、テキストマイニングによる分析を行った、その結果、図7-28のようなクラスタマップが示された。

609件の回答文を分析した結果、1,114の内容語が抽出され、概ね40個のクラスタが作成された。内容語の頻度に基づく、主なクラスタを表7-28に示す。

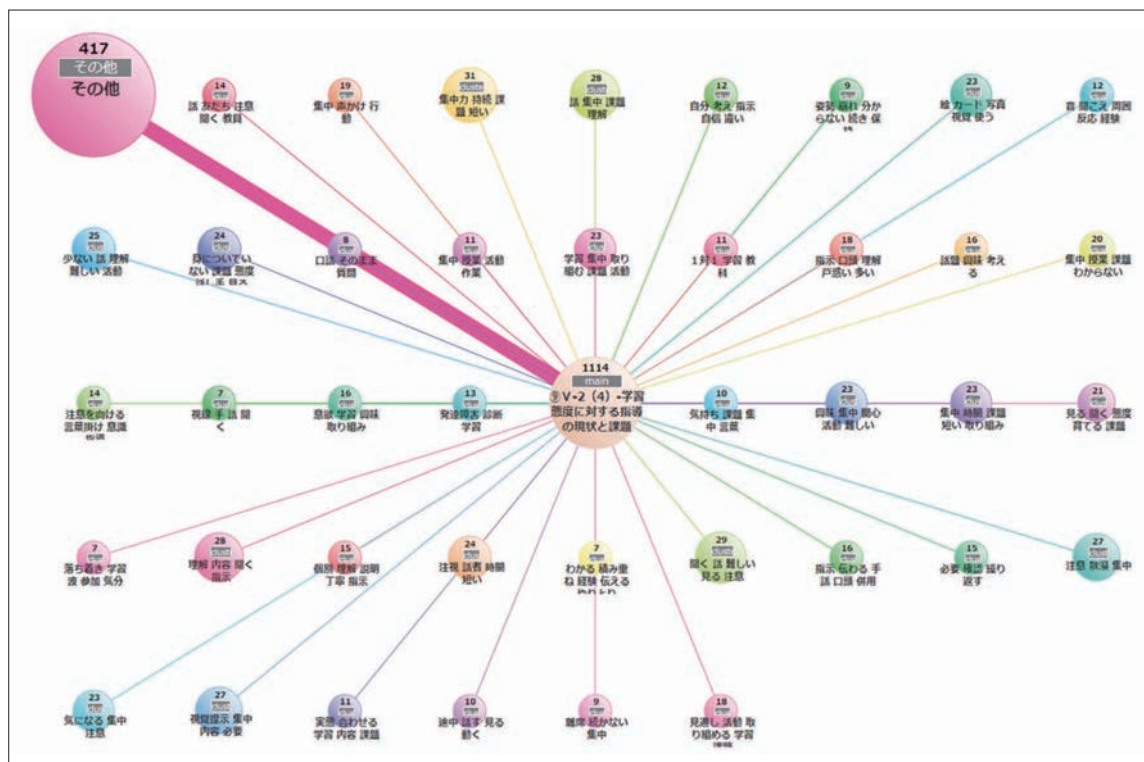


図7-28 学習態度の現状課題に関するクラスタマップ

表7-28 学習に課題を抱えている幼児児童生徒に対する学習態度の現状と課題（内容語数）

1. その他（417）
2. 興味や集中力が持続しない（31）
3. 話者に注目して話を聞くことが課題（29）
4. 教員の指示は聞いているが、理解できていない（28）
4. 注意散漫にないやすく、難しい話題になると注意をそらす（28）
6. 視覚的な刺激に注意が取られ、散漫になりやすい（27）
6. 興味を示す視覚的刺激を用いて学習を進める（27）
8. 集団での学習ではなしをききとり理解することができない（25）
9. 学習のルールを身に付けるのが課題（24）
9. 話し手に注視して聞くことが難しい（24）

※（ ）の数字は、全体内容語1,114語のうち当該クラスタに出現した内容語の数

現状と課題として、不安感が強いので、成功体験を繰り返し、自信を付けさせる、何かに気をとられると集中が途切れる、指示し終わった後、再度指示し直さないといけないなど、様々な意見に関するその他のほかに、多くあげられたのは、視覚的刺激などに注意が取られることや、興味や注意が続かないこと、話し相手に注目・注視して話を聞くことに課題があること、それにより話の内容が良く理解できていないことなどが指摘されている。一方、興味のある視覚的刺激を用いることにより、興味や注視を持続させる学習も述べられていた。

学年別および重複障害の有無別の学習態度の現状と課題に関する記述の一部を以下に示す。

①幼稚園

- ・指導の工夫
- ・注意力、持続力
- ・傾聴態度、学習行動
- ・言語力との関連
- ・精神的問題（安定感、意欲、興味など）
- ・集団適応
- ・他の障害との問題

②小学部

- ・言語的指示の理解に困難、視覚的手段の活用によるコミュニケーションの育成
- ・障害理解に問題があり、聞こえにくさに対する意識の欠如
- ・集中力が続かない
- ・わからないことに対するメタ認知ができていない
- ・ことばの理解はできるが、行動が伴わない
- ・話の内容や伝え方を工夫している
- ・興味がないことへの学習意欲が低い

③中学部

- ・指導の工夫
- ・注意力、持続力
- ・言語力の不足
- ・学習行動
- ・学習意欲の低さ
- ・集団適応
- ・興味関心の狭さや偏り
- ・状況理解や見通しの困難
- ・学習内容の定着が難しい
- ・聞こえにくさに対する意識

④高等部

- ・聞き取り
- ・理解
- ・集中力、注意力、思考力
- ・学習態度
- ・コミュニケーション
- ・状況理解や見通し
- ・視覚情報の活用
- ・授業展開の工夫
- ・手話の併用
- ・学習に向かう意欲の弱さ、モチベーションの課題

3) コミュニケーション能力

コミュニケーション能力については、「コミュニケーション能力の程度」、「語彙力の程度」、「口述力の程度」の3つの内容について、5段階の評価を行い、3つの評価項目の合計点が平均以下（10点以下）の場合、幼児児童生徒の現状と課題について、記述を求めた。

(1) 評価項目の結果について

コミュニケーション能力に関する3つ項目の評価結果を、表7-29に示す。全体的には、コミュニケーション能力は、同年齢の健聴の幼児児童生徒に比べると、4割弱は同等以上、6割弱は低さを指摘する結果となった。語彙力においては、同等以上が2割強に留まっており、7割以上が低さを指摘している。口述力においても、同等以上は35%程度に留まっており、6割以上が低さを指摘する結果となった。コミュニケーション能力が、語彙力や口述力に支えられている観点からすれば、コミュニケーション能力の低さは、語彙力や口述力の低さにその原因を帰することもできよう。このような全体的にコミュニケーション能力が低い傾向は、「重複なし」の幼児児童生徒においてはその割合がさらに高くなる傾向が示されており、「重複あり」の幼児児童生徒の場合は、1割の幼児児童生徒のみが同等以上、8割以上が低い結果が示され、聴覚障害の上に他の障害との重複障害によるコミュニケーション能力への影響の大きさがうかがえる。語彙力は、「重複あり」の場合、9割以上が低く、「重複なし」の場合であっても、7割以上が低いことを指摘しており、このような傾向は口述力においても同様の傾向が示されている。聴覚障害におけるコミュニケーション能力を支える語彙力と口述力といった要素のレベルの低さが示されているといえよう。

表7-29 コミュニケーション能力の現状

		高い (5点)	やや高い (4点)	同じくらい (3点)	やや低い (2点)	低い (1点)	無回答	平均評定値
コミュニケーション能力	全体	3.50	7.60	28.50	34.30	24.00	2.10	2.31
	重複なし	4.40	8.90	32.90	35.30	17.30	1.20	2.47
	重複あり	0.70	2.50	13.40	31.30	47.90	4.20	1.71
語彙力	全体	1.80	5.90	16.00	29.80	44.90	1.70	1.88
	重複なし	2.20	7.20	19.90	32.00	37.80	0.90	2.03
	重複あり	0.40	1.40	2.80	21.50	70.10	3.90	1.34
口述力	全体	2.70	9.50	25.30	31.40	28.80	2.40	2.24
	重複なし	3.20	11.40	30.20	31.90	21.60	1.70	2.42
	重複あり	1.40	2.50	8.80	29.20	53.90	4.20	1.63

(2) 平均以下の幼児児童生徒の現状と課題

3つのコミュニケーション能力に関する総合評価を表7-30に示す。

全体として、10%以下の幼児児童生徒のみがコミュニケーションの問題はなく、88%以上の幼児児童生徒がコミュニケーションの面におけるサポートを必要としている結果が示された。「重複あり」の幼児児童生徒においては94%の幼児児童生徒がサポートを必要としている現状が示された。

表7-30 コミュニケーション能力の総合評価

コミュニケーション能力 (全体)	10点以下	11点以上	無回答	平均評定値
全体	88.10	9.30	2.60	6.44
重複なし	86.50	11.60	1.90	6.93
重複あり	94.00	1.80	4.20	4.68

(3) コミュニケーションに関する現状と課題

コミュニケーション力の評定値が10点以下の幼児児童生徒に対する学習態度の現状と課題については、合計1,030件の回答があった。1,030件の回答文について、テキストマイニングによる分析を行った結果、図7-29のようなクラスタマップが示された。

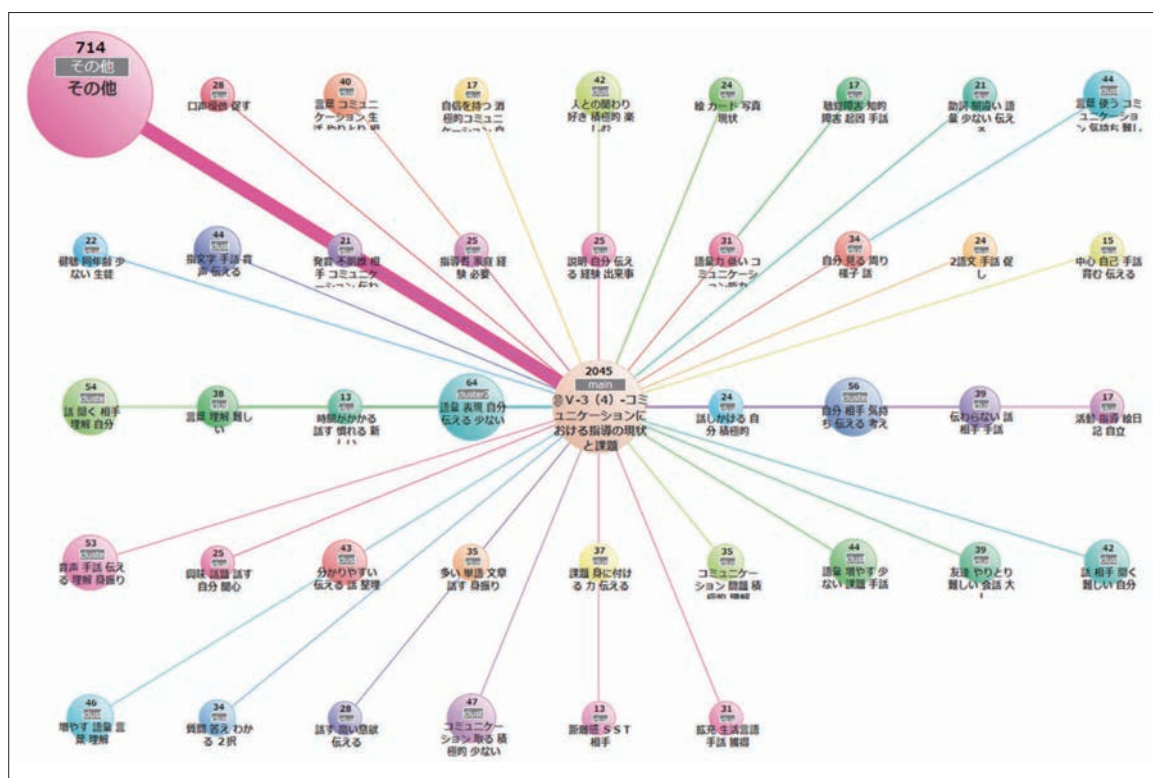


図7-29 コミュニケーション力の現状と課題に関するクラスタマップ

1,030件の回答文を分析した結果、2,045の内容語が抽出され、概ね40個のクラスタが作成された。内容語の頻度に基づく主なクラスタを表7-31に示す。

表7-31 コミュニケーション力の現状と課題（内容語数）

1. その他（714）
2. 語彙が不足し、自分の話したい内容がうまく表現できない（64）
3. 相手の気持ちを考えず、自分の考えを一方的に話す（56）
4. 相手の話を聞く態度の問題（54）
5. 音声や手話でコミュニケーションできるが、理解できる生活言語が少なく構文化できない（53）
6. 慣れた人じゃないと積極的にコミュニケーションをとることが難しい（47）
7. 理解・表出語彙を増やし、文でやりとりできるようにすること（46）
8. 語彙が少なく、増やすことが課題（44）
8. 手話や指文字を使ったコミュニケーションに意欲はある（44）
8. 手話や指文字を使ったコミュニケーションはできるが、音声によるやりとりは難しい（44）

※（ ）の数字は、全体内容語2,045語のうち当該クラスタに出現した内容語の数

現状と課題として、相手の気持ちを考えず、情動的に動いてしまう、ときどき勘違いをして怒ることがある。聞き間違いや聞き返しが多いなど、様々な意見に関するその他のほかに、多くあげられたのは、相手の気持ちを考慮しつつ、自分の考えを相手に分かるように伝えること、表現のための語彙が少なく、気持ちを言葉として表現できないなどの語彙力の不足に関する指摘、音声言語によるコミュニケーションは難しいが、手話や指文字を用いたコミュニケーションは意欲があることが述べられている。一方、手話や指文字の活用ができて、音声言語によるコミュニケーションが難しいことも指摘されている。

学年別および重複障害の有無別のコミュニケーション力の現状と課題に関する記述の一部を以下に示す。

①幼稚部

- ・ことばの力を高めること
- ・やりとりや質問への応答力の育成
- ・手話など、多様なコミュニケーション手段の活用
- ・教師の仲介や声かけ、活動の工夫
- ・対人関係、共感性、思いの共有
- ・視覚的手かがりの活用
- ・コミュニケーションへの意欲や積極性を育てる
- ・落ち着きや集中力を高める態度
- ・保護者との連携や保護者支援
- ・聴覚活用

②小学部

- ・語彙力が不十分
- ・文法力のなさ
- ・コミュニケーションの意欲の低さ
- ・相手を意識したコミュニケーションがとれていない

- ・友人関係は良好
- ・語彙・文法力の不足
- ・発音の曖昧さ
- ・感情表現が難しい
- ・興味関心の幅が狭い

③中学部

- ・指示の理解の確認が必要
- ・提出物・宿題・忘れ物が多い
- ・言語力の不足し、うまく表現できない
- ・予定に応じた行動や順序立てた行動の実行が難しい
- ・家庭生活と生活習慣の不規則
- ・注意、集中力の欠如
- ・整理整頓ができない
- ・コミュニケーションのルールやマナーが守れない
- ・障害認識、自己認識ができていない
- ・相手の心情理解にやや課題がある

④高等部

- ・心理的不安定さ
- ・集団行動、社会性の問題
- ・自立心やセルフコンピテンスの欠如
- ・計画性のなさ
- ・学習や生活の態度
- ・コミュニケーションの課題
- ・個別指導が必要
- ・メモ、例示による確認
- ・ルール作り
- ・教職員の連携による対応
- ・発音が不明瞭、自信のないことばは更に小さく発音し、コミュニケーションの妨げ
- ・自ら発信することに苦手意識
- ・自ら意志を主張することは少なく、積極的に関わろうとしない

4) 学校生活

学校生活については、「学習への参加状況」、「家庭課題への対応状況」、「指示に対する遂行能力」の3つの項目について、5段階で評価し、3つの評価項目の合計点が平均以下（8点以下）の場合、幼児児童生徒の現状と課題について記述を求めた。

(1) 評価項目の結果について

学校生活の現状に関する3つの評価項目の結果を、表7-32に示す。

表7-32 学校生活の現状

参加状況	多い (5点)	やや多い (4点)	同じくらい (3点)	やや少ない (2点)	少ない (1点)	無回答	平均評定値
全体	16.60	18.10	28.50	22.70	12.80	1.40	3.03
重複なし	18.60	20.50	30.50	21.70	7.90	0.70	3.20
重複あり	9.50	9.50	21.10	26.10	30.60	3.20	2.39
提出物の状況	常に提出 (5点)	ほとんど提出 (4点)	時々忘れる (3点)	ほとんど忘れる (2点)	常に忘れる (1点)	無回答	平均評定値
全体	27.00	31.30	28.10	8.40	2.10	3.10	3.75
重複なし	27.10	32.90	28.40	7.80	1.80	2.00	3.77
重複あり	28.20	25.70	26.40	10.20	2.80	6.70	3.71
指示後の遂行	非常に良好 (5点)	良好 (4点)	ふつう (3点)	あまり良好ではない (2点)	良好ではない (1点)	無回答	平均評定値
全体	6.90	27.80	37.80	17.90	8.30	1.40	3.07
重複なし	7.80	31.80	38.20	15.50	5.90	0.80	3.20
重複あり	3.90	13.70	35.90	26.40	17.30	2.80	2.56

全体的には、クラスでの話し合いへの参加状況の多少は、同年齢の健聴の幼児児童生徒に比べると、同等以上が6割強、4割弱は少なさを指摘している。提出物の状況についても、1割の幼児児童生徒が忘れることはあるものの、8割以上は良好であることが示された。また、指示後の課題遂行においても、7割以上が良好であることが示されている。「重複あり」の幼児児童生徒の場合も、4割以上が話し合いに参加しており、提出物の状況は8割良好であること、指示後の課題実施においても、5割以上が良好である結果となった。

学校生活の現状は、全体的には、学校への参加のための準備やその実施において良好な状況が見られていること、「重複あり」の幼児児童生徒においても、学校生活のためのしっかりとした準備と比較的良好な実施が行われており、参加状況においても4割以上の幼児児童生徒が参加するなどの状況が示された。

(2) 平均以下の幼児児童生徒の現状と課題

3つの学校生活に関する総合評価を表7-33に示す。全体として、7割以下の幼児児童生徒が大きな問題なく学校生活を送っていること、しかしながら、25%以上の幼児児童生徒が学校生活でのサポートが必要であり、「重複あり」の幼児児童生徒の場合は、4割以上の幼児児童生徒が学校生活の面におけるサポートを必要としている結果が示された。

表7-33 学校生活の総合評価

学校生活（全体）	8点以下	9点以上	無回答	平均評定値
全体	25.20	71.20	3.50	9.88
重複なし	20.70	77.00	2.30	10.19
重複あり	41.20	51.40	7.40	8.75

(3) 学校生活の指導の現状と課題

学校生活の評定値が8点以下の幼児児童生徒に対する学習態度の現状と課題については、合計361件の回答があった。361件の回答文について、テキストマイニングによる分析を行った結果、図7-30のようなクラスタマップが示された。

学年別および重複障害の有無別のコミュニケーション力の現状と課題に関する記述の一部を以下に示す。

①幼稚部

- ・指導上の工夫、個別対応
- ・ことば・コミュニケーション
- ・保護者、家庭との連携・保護者支援
- ・気持ちの安定、意欲、課題に対する意識
- ・基本的生活習慣、身辺自立
- ・対人関係

②小学部

- ・生活リズムが崩れやすい
- ・提出物等の忘れ
- ・聞き漏らし
- ・他人の心を推測することが難しい
- ・家庭との連携し、意識的な生活習慣を形成する
- ・語彙・文法力の不足
- ・発音の曖昧さ
- ・感情表現が難しい
- ・興味関心の幅が狭い

③中学部

- ・指示の理解の確認が必要
- ・提出物・宿題・忘れ物が多い
- ・言語力の不足し、うまく表現できない
- ・予定に応じた行動や順序立てた行動の実行が難しい
- ・家庭生活と生活習慣の不規則
- ・注意、集中力の欠如
- ・整理整頓ができない
- ・コミュニケーションのルールやマナーが守れない
- ・障害認識、自己認識ができていない
- ・相手の心情理解にやや課題がある

④高等部

- ・心理的不安定さ
- ・集団行動、社会性の問題
- ・自立心やセルフコンピテンスの欠如
- ・計画性のなさ
- ・学習や生活の態度
- ・コミュニケーションの課題
- ・個別指導が必要

- ・メモ、例示による確認
- ・ルール作り
- ・教職員の連携による対応
- ・発音が不明瞭、自信のないことは更に小さく発音し、コミュニケーションの妨げ
- ・自ら発信することに苦手意識
- ・自ら意志を主張することは少なく、積極的に関わろうとしない
- ・手話の併用
- ・学習に向かう意欲の弱さ、モチベーションの課題

5) 学校での行動

学校での行動については、「そぐわない行動・不適切行動の程度」、「ストレス・情緒的落ち着きなさの程度」、「対人関係の維持の程度」の3つの項目について、5段階で評価し、3つの項目の評価の合計点が平均以下（9点以下）の場合、幼児児童生徒の現状と課題について記述を求めた。

(1) 評価項目の結果について

学校での行動の現状に関する3つの評価項目の結果を、表7-35に示す。

全体的には、そぐわない行動や不適切な行動の程度は、同年齢の健聴の幼児児童生徒に比べると、同等以上が8割弱以上、2割強は多さを指摘している。ストレスや落ち着きなさの程度状況においても、3割弱の幼児児童生徒ストレスが多い結果が示された。人間関係においても85%以上の幼児児童生徒が普通または良好な関係を維持していることが示された。「重複あり」の幼児児童生徒においては、4割以上においてそぐわない行動が多く出現しており、ストレスや落ち着きなさの多さの割合も4割以上に上っている。しかしながら、「重複あり」の幼児児童生徒であっても8割以上の幼児児童生徒が普通または良好な人間関係を築いていることが示された。

表7-35 学校での行動の現状

そぐわない行動 ・不適切行動	ない (5点)	ほとんどない (4点)	時々ある (3点)	やや多い (2点)	多い (1点)	無回答	平均評定値
全体	19.10	32.40	26.80	12.80	7.80	1.10	3.43
重複なし	21.30	35.20	28.10	10.40	4.70	0.30	3.58
重複あり	11.60	22.90	21.80	21.80	18.70	3.20	2.87
ストレス・ 落ち着きなさ	ない (5点)	ほとんどない (4点)	時々ある (3点)	やや多い (2点)	多い (1点)	無回答	平均評定値
全体	11.00	28.80	31.70	17.20	10.10	1.20	3.13
重複なし	12.40	31.00	33.90	15.60	6.60	0.50	3.27
重複あり	6.00	19.70	25.00	23.90	22.20	3.20	2.62
良好な人間関係の 維持	非常に良好 (5点)	良好 (4点)	ふつう (3点)	あまり良好 ではない(2点)	良好ではない (1点)	無回答	平均評定値
全体	11.80	41.10	34.80	8.90	2.10	1.30	3.52
重複なし	13.40	45.30	31.20	7.80	1.70	0.60	3.61
重複あり	7.00	26.40	47.50	12.70	3.50	2.80	3.21

(2) 平均以下の幼児児童生徒の現状と課題

学校での行動の現状に関する3つの項目の総合評価を表7-36に示す。全体として、6割以下の幼児児童生徒が大きな行動上の問題なく学校生活を送っていること、しかしながら、35%以上の幼児児童生徒が学校生活において行動上の問題に対するサポートが必要であることが示された。「重複あり」の幼児児童生徒の場合は、6割近くの幼児児童生徒が学校生活の面におけるサポートを必要としている結果が示された。

表7-36 学校での行動の総合評価

学習態度（全体）	9点以下	10点以上	無回答	平均評定値
全体	35.1	63.2	1.7	10.08
重複なし	29.5	69.7	0.8	10.45
重複あり	55.6	40.5	3.9	8.71

(3) 学校での行動の指導の現状と課題

学校での行動の評定値が8点以下の幼児児童生徒の行動の現状と課題については、合計424件の回答があった。424件の回答文について、テキストマイニングによる分析を行った結果、図7-31のようなクラスタマップが示された。

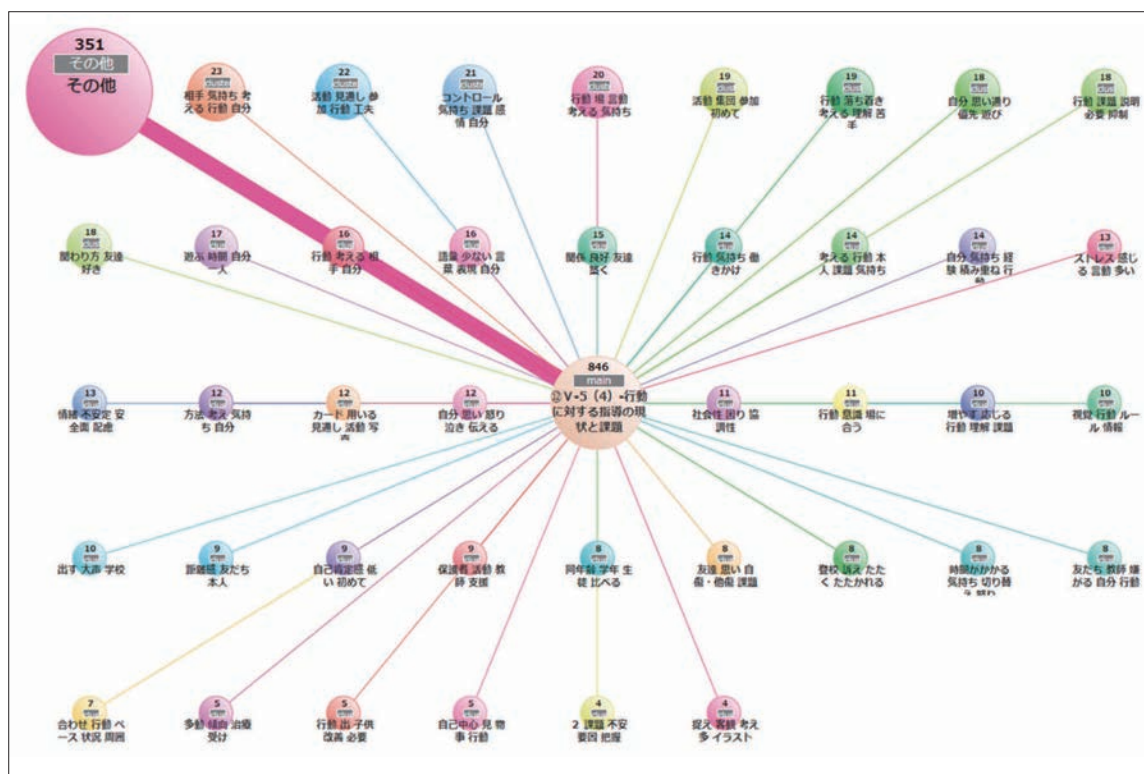


図7-31 学校での行動の現状と課題に関するクラスタマップ

424件の回答文を分析した結果、846の内容語が抽出され、概ね40個のクラスタが作成された。内容語の頻度に基づく、主なクラスタを表7-37に示す。

表7-37 学校での行動の現状と課題（内容語数）

1. その他（351）
2. 周りの状況や相手の気持ちに応じた行動や反応が難しい（23）
3. 見通しが持てるような活動の流れの工夫や予定の立てが必要（22）
4. 自分の気持ちや感情をコントロールすることが課題（21）
5. 相手の気持ちや状況を考えた言動が難しく、意地悪な行動、自分勝手な行動をすることがある（20）
6. 初めての活動や集団活動に不安をもち、活動に参加することが難しい場合がある（19）
6. 基本的なルールや活動の流れの意味が理解できず、行動が落ち着かない（19）
8. 自分の思いを優先させる（18）
8. こだわりがあり、気持ちを抑制したり、我慢したりすることができない（18）
8. 友達に関わるより教師に関わることが多く、かかわり方が一方的である（18）

※（ ）の数字は、全体的内容語846語のうち当該クラスに出現した内容語の数

現状と課題として、善悪の判断は一応できるが自分の欲求に逆らえずやってしまう、気に入らないことがあると自分より弱いと思っている生徒に対して手が出てしまう、行動が体調や気分によるところが大きいなど、様々な意見に関するその他のほかに、多くあげられたのは、周囲や相手の状況や気持ちに応じた行動や自分の気持ちや感情をコントロールすることが難しく、自分の欲求や思いを優先させたり、勝手な行動をとったりすることがあること、活動においても慣れるまで、不安を感じることで、そのため落ち着かない行動になってしまうことが述べられている。

学年別および重複障害の有無別のコミュニケーション力の現状と課題に関する記述の一部を以下に示す。

①幼稚部

- ・ 集団行動、状況把握、ルール理解、抵抗に課題
- ・ 気持ちの安定・意欲・積極性に欠ける
- ・ 活動や指導の工夫、個別対応が求められる
- ・ 衝動性、落ち着きのなさ、こだわりの問題
- ・ 自己中心的行動
- ・ 対人関係の課題
- ・ ことばやコミュニケーションの課題
- ・ 家庭や保護者支援

②小学部

- ・ 自分本位の行動が多い
- ・ 障害理解、自己認識の欠如
- ・ 突発的なことへの対応が苦手
- ・ 興味のある物への衝動性
- ・ 家庭との連携し、意識的な生活習慣を形成する

③中学部

- ・他者理解の困難
- ・情緒・心理面での不安定さ
- ・日常生活上のマナーの欠如
- ・言語表現力
- ・注意、集中力の欠如
- ・友人関係上のトラブル
- ・コミュニケーションのルールやマナーが守れない

④高等部

- ・心理的不安定さ、ストレス
- ・行動面の課題
- ・メタ認知の欠如
- ・障害認識や自己理解の欠如
- ・状況理解や判断の難しさ
- ・見通しを立てることの難しさ
- ・社会性や集団活動の課題
- ・コミュニケーションや対人関係上のトラブル
- ・定期的な話し合いやカウンセリングが必要
- ・個別指導が欠かせない
- ・ルールを守り、予定を立てることが難しい
- ・手話活用の問題

II まとめと今後の課題

1. 回答状況について

今回の調査では、全国の特別支援学校（聴覚障害）107校に在籍する幼児児童生徒5,706人のうち、人工内耳装用幼児児童生徒1,894人を対象に実施され、695人の担当教員から合計1,311人分の回答が得られた。このことから、全国の特別支援学校（聴覚障害）在籍幼児児童生徒における人工内耳装用率は概ね33.2%であることが明らかになり、これらの人工内耳装用幼児児童生徒のうち、本調査への回答率は69.3%であった。

2. 教員について

回答教員の教育歴の平均は16.4年、そのうち聴覚障害幼児児童生徒に対する指導歴の平均は9.2年であることから、聴覚障害教育の指導経験が比較的豊かな教員であると思われる。しかし、回答者の中で、指導歴5年以下または10年以下の教員が全体の約68%に上っていることや、公立学校での勤務年数による移動などを考えると、人工内耳装用幼児児童生徒を含めた聴覚障害教育における専門性向上に向けた持続的取り組みが必要と思われる。求められる研修の内容も、人工内耳に関する基礎的な内容から他機関との連携まで多岐にわたっており、教員の経験年数や専門性に応じた研修会の開催が望まれる。

3. 幼児児童生徒の実態について

調査の結果、受診時期は概ね1歳台前半であった。

人工内耳装用状態は、右の片耳装用が一番多く、次に両耳装用と左の片耳装用が同程度であった。「重複あり」は、両耳装用の割合が高く、積極的に音を活用するためのものと思われる。人工内耳装用開始時期は、2歳台が一番多く、次に、1歳台と3歳台がほぼ同じ割合が多かった。手術後の聴力は、人工内耳装用後40～50dBHL、重複障害による影響はほとんど見られないが、左耳より右耳の方が幾分聴力レベルが高い傾向が示された。

重複障害の種類としては7割以上が知的障害との重複であった。

普段使用しているコミュニケーションモードは、「重複なし」の幼児児童生徒では、音声、手話、指文字が多く使われていた。学習時も、音声が一番多く、次に手話、その次に指文字が多く使われていた。「重複あり」の幼児児童生徒は、手話が一番多く、次に、音声と指文字がよく使われていた。

対象幼児児童生徒の学校歴では、他の教育機関へのアクセスは幼児期が一番多く、幼稚園、小学部、中学部へと年齢が上がるにつれて、特別支援学校（聴覚障害）への在籍者の増加が示されていた。今後の進路では、対象幼児児童生徒の70～80%が上の学部への進学を希望していること、高等部以降の進路としては、「重複なし」は大学等への進学希望と就職の割合が同程度であった。「重複あり」の生徒の場合は、就職希望が77%を示した。

聴覚活用の状態は、7割以上が良いとの評価であったが、言語音の聞き取りや傾聴態度の良い評価は若干下がる傾向であった。

同年齢の健聴幼児児童生徒に比べて、本調査の幼児児童生徒の言語力は概ね7割以上が低い評価を得ており、「重複あり」の幼児児童生徒の場合は9割以上低い結果が示された。言語活動に関する指導の現状においても、語彙力、言葉の聞き取る力、文法力、状況把握力、言語活動に関する意欲の不足などが示唆された。

4. 学校での学習・生活について

学業成績では、潜在的な学習能力は高く評価されているものの、幼児児童生徒の5割以上が、同年齢の健聴の幼児児童生徒に比べて、学業成績が低く、2割のみが同等あるいはそれ以上であることが示された。学業成績を支える読書力においても、同じ傾向が見られている。学業成績では、「重複なし」の約5割、「重複あり」の76%がサポートなどの支援が必要な状態であった。

学習態度においては、6割以上の幼児児童生徒が健聴の幼児児童生徒に比べて、注意力、注意持続、指示後の実行における低さが指摘されている。学習態度においても、「重複なし」の約4割強、「重複あり」の7割以上がサポートなどの支援が必要な状態であった。

コミュニケーション能力では、幼児児童生徒の6割が、健聴の幼児児童生徒に比べて、低く、コミュニケーション力を支える語彙力や口述力の低さの影響も示されている。コミュニケーション能力においては、「重複なし」の約87%、「重複あり」の94%がサポートなどの支援が必要な状態であった。

学校生活では、学校での参加状況は比較的良好であること、学校での参加を支える提出物の

状況や指示後の遂行においても良好であった。学校生活では、「重複なし」の約2割、「重複あり」の4割がサポートなどの支援が必要な状態であった。

学校での行動においても、その場にそぐわない、適切ではない行動の出現やストレスや落ち着きなさの頻度は、健聴の幼児児童生徒に比べて、顕著に多くはなく、85%以上が良好な人間関係を維持していた。学校での行動においても、「重複なし」の約5割、「重複あり」の56%がサポートなどの支援が必要な状態であった。

5. 今後の課題

今回の分析により、人工内耳装用による音や聴覚活用における肯定的な影響とともに、補聴器装用幼児児童生徒において常に指摘されてきた言語発達や指導上の問題が、人工内耳装用幼児児童生徒においても同じ現象が見られていることが示唆された。また、大量の記述式の意見に関しては、全体の回答に基づくカテゴリ分析が行われ、質的な傾向の分析ができた。

しかしながら、今回の分析は、特別支援学校（聴覚障害）全体のデータを単純集計した結果に基づく検討に留まっており、学部間の変化や人工内耳装用時期、装用状態、コミュニケーションモードに基づく聴覚活用、言語活動などの変数による特徴の詳細、これらの変数と学校での学習と生活に関する程度との関連についても、詳細な検討が及ばなかった。今後、これらの点に関する詳細な検討が望まれる。